



国立大学法人
和歌山大学

2019

地域インターンシッププログラム活動報告書



Local Internship Program (LIP)

地域が抱える課題を住民とともに発見し、

その解決方法を考える

和歌山大学観光学部

はしがき

和歌山大学観光学部における「地域インターンシッププログラム (LIP)」の取り組みは、2008 年度に開始されて以降、これまでに 129 件のプログラムが実施され、延べ 1400 人以上の学生が地域での様々な活動を通じた実践的な学びの機会を得ています。現地を訪れ、地域の方々とともに課題に取り組むなど密度の濃い交流を続けた結果、なかには数年にわたる継続的なプログラムに発展する活動もみられるようになりました。学生の受け入れやプログラムの実施にご尽力いただいている地方自治体や関係諸団体の皆様のご支援とご協力に心から感謝を申し上げる次第です。

さて本学部は、「観光経営」「地域再生」「観光文化」の 3 つの基本領域を軸として、これらの領域を融合的かつ横断的に学ぶカリキュラムに取り組んでいます。本カリキュラムにおいては、高度な専門性を発揮できるようになること、そして、現場での創造的実践力を獲得することを目標に、国際性を高める教育と国内外の地域の諸課題に取り組む実践型教育を重視しています。地域を訪ね現場で起きている事柄を身をもって学ぶことができる LIP は、観光学部の実践型教育の一翼を担う取り組みとして、もはや欠かすことのできない位置を占めています。今後は、これまでの成果と経験を活かしつつ、地域課題に則したプログラムを実施できるよう日々改善を図り、さらに質の高い地域連携活動へと発展させていく所存です。

また、2019 年度からは、全プログラムの活動報告を行う「LIP 合同活動報告会」を実施いたしました。12 年目にして初の試みでもあり、まだまだ改善の余地はありますが、それぞれの活動を共有し、意見交換を行う場を学生たちが主体となって企画し、LIP の質的向上を図る上でも大変有意義な機会となりました。ご参加いただいた皆様には、心より御礼申し上げます。

今後とも、本学部では引き続き地域連携活動に取り組んで参ります。LIP の活動に一層のご支援ご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

2020 年 3 月

和歌山大学観光学部
地域連携委員会 永瀬節治

目次

はしがき	1
目次.....	3
1. LIP の概要とこれまでの歩み	4
1) LIP の概要	4
2) データから見る LIP の歩み	5
2. 2019 年度 LIP 活動報告	8
1) 和歌山県岩出市.....	10
2) 和歌山県紀の川市.....	12
3) 和歌山県海草郡紀美野町	14
4) 和歌山県海草郡紀美野町	16
5) 和歌山県有田市.....	18
6) 和歌山県有田郡広川町	20
7) 和歌山県西牟婁郡上富田町.....	22
8) 和歌山県東牟婁郡那智勝浦町.....	24
9) 和歌山県全域.....	26
10) 大阪府阪南市.....	28
11) 和歌山県有田郡有田川町.....	30
12) 和歌山県日高郡日高川町および伊都郡かつらぎ町	32
13) 和歌山県日高郡美浜町	34
14) 岩手県胆江地方および和歌山県	36
参考資料.....	38
1) 2019 年度 LIP 合同活動報告会パンフレット	38
2) 2019 年度 LIP リーフレット「地域に観光を学ぶ」	40
3) LIP の沿革	42
4) これまでの LIP 活動地域と活動テーマ一覧	44

1. LIP の概要とこれまでの歩み

1) LIP の概要

和歌山大学観光学部では、和歌山県内及び大阪南部の市町村などの協力のもと、地域が抱える課題を地域住民とともに発見し、その解決方法を考える「地域インターンシッププログラム」（通称：LIP¹）を実施している。本プログラムは、地域活性化に関心をもつ学生が、現地に足を運び、地域住民と連携することによって地域の課題や調査活動に取り組むもので、「学生と地域を活性化したい」、「地域の魅力を発見したい」といった地域からの提案を受け、毎年複数の活動を実施している。

LIP に参加する学生は、学内の事前学習や現地視察を通して地域の実情を学び、さらには現地調査や地域住民との交流、イベントの企画運営などを通じて、それぞれの地域の真の魅力や課題と向き合っていく。具体的なプログラムとしては、観光施設の職員や利用者への聞き取り、宿泊施設や農家民泊のモニター、集客イベントの企画運営、観光資源調査やマップ作成、就業体験などに取り組んできた。

「この地域にはどのような観光資源があるか」、「埋れている観光資源はないか」、「観光資源が有効に活用されているか」、「どうすれば地域が元気になるか」。こうした課題に対して、地域住民は生活者の視点から、学生は「ヨソ者」の視点から意見を出し合い、ともに活動をしていく。このような対話や活動が、双方にとって新たな気づきの機会となることもこのプログラムの特徴である。

LIP は、こうした相互作用を通じて、地域住民は「ヨソ者」の力を活かしながらより自立的なまちづくり活動を行う力を、そして学生は地域住民の思いを理解しつつ、地域活性化の方法を提案できる力を養い、地域を支える人材として活躍することを目指している。

上記の趣旨を踏まえ、本プログラムは、学生が、「地域の方々と交流を図りながら、観光振興や地域再生の実践を現場で学ぶ」ことができる内容を含むことを実施の要件としている。

なお、LIP には、和歌山県内及び大阪南部の市町村など、地域から学生が地域再生や観光振興の現場を体験できるプログラムを公募するタイプ（公募タイプ）と、観光学部の専任教員が、地方公共団体などとの共同研究などを通じた連携のもとにプログラムを申請するタイプ（申請タイプ）の2タイプがある。

また、LIP は 2012 年度より単位として認定されている²。地域での活動が授業として開講され、単位化されたことは、学生にとっても地域活性化への関心をより広げる契機となっており、学生の参加意欲向上にも寄与している。

¹ 2011 年に RIP（Regional Internship Program）から LIP（Local Internship Program）に改称。

² 単位取得のためには事前事後学習を含めて 30 時間以上の活動が求められる。活動時間に応じて、9 期生以前は「地域観光実習」、10 期生以降は「基礎自主演習」または「プロジェクト自主演習」の単位が認定される。

2) データでみる LIP の歩み

観光学部で実施している LIP は 2019 年度で開始 12 年目を迎えた。ここでは、これまでの LIP の歩みについて、データをもとに示してしていく。

表 1 は、2008 年度以降の年度別実施プログラム数を示している。年度ごとのプログラム数にはばらつきがあり、最多 21 件（2016 年度）、最少 3 件（2010 年度）となっている。2011 年度からは、観光学部専任教員からの申請により実施される申請タイプが創設され、プログラム数が安定するとともに幅広い活動が可能となっている。

表 1 年度別プログラム数

2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	合計
6	8	3	4(1)	11(5)	5(2)	10(3)	15(6)	21(7)	19(4)	13(3)	14(4)	129

※カッコ内は申請タイプのプログラム内数

次に、図 1 は年度別の参加学生数を示している。参加学生延べ人数は、2014 年に 100 名、2016 年には 200 名を超えるなど、増加している。これは、実施プログラム数が増加したとともに、プログラムあたりの定員規模の拡大が起因していると考えられる。ただし、全プログラムが一様に拡大傾向を示しているわけではなく、現状では、大規模のものと小規模のものが並存する状態にある（2019 年度は最少 2 名、最大 33 名）。この点は、プログラムの内容など、地域の課題やニーズに即したかたちで活動が実施されていることが影響している。

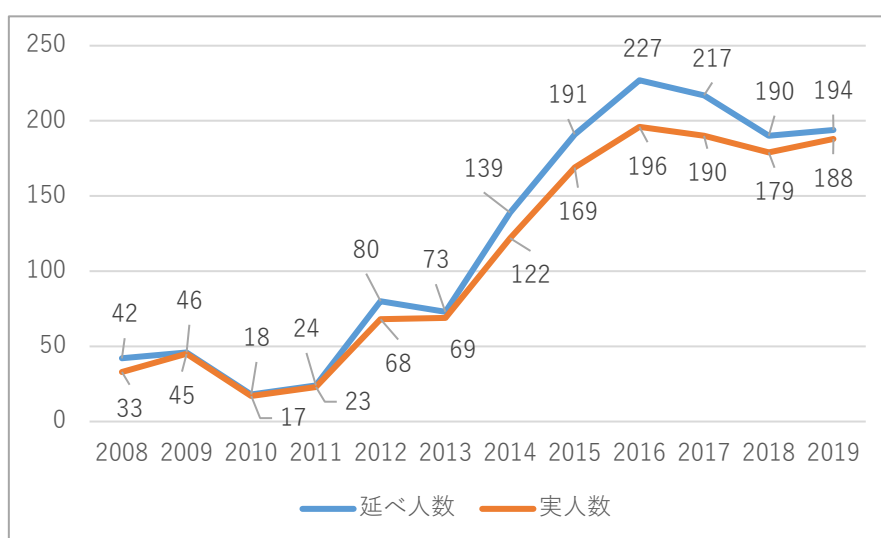


図 1 年度別参加学生数

表2に示した通り、学年別の参加学生数は1回生がもっとも多い。低学年次から地域での活動に関心を持ち、積極的に地域と関わりたいと考える学生が増加していることを示している。このような傾向は近年みられるようになったもので、図2のように、プログラム創設初期は2、3回生の参加が中心であった。

また、4回生の参加者がみられるようになったことも近年の特徴である。これは、単年度のプログラムではなく、同様の地域において継続的に実施するプログラムが増加していることが要因であると推察される。

表2 学年別参加学生数

	1回生	2回生	3回生	4回生
延べ人数	1441	535	477	320
実人数	1299	508	428	100

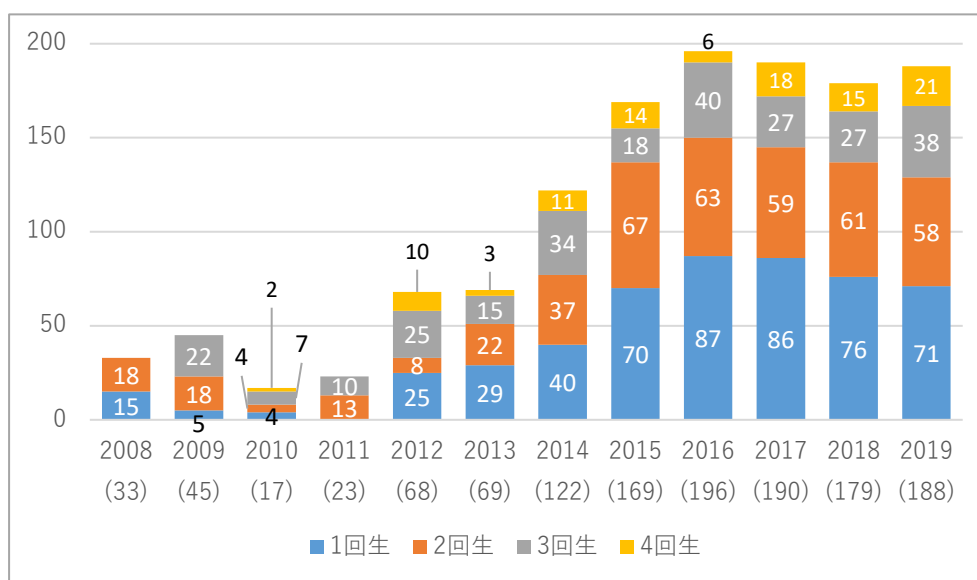


図2 学年別参加学生数の変遷 (実人数ベース)

次頁図3に示すのは、プログラムあたりの平均参加学生数である。先に述べた定員規模の拡大によりプログラムあたりの平均参加学生数が増加傾向であったが、近年は小規模のプログラムが多く実施されていることもあり、徐々に減少傾向にあった。2018年度からは、定員規模の大きいプログラムが複数みられることで、プログラムあたりの平均参加学生数が14人前後で推移している。

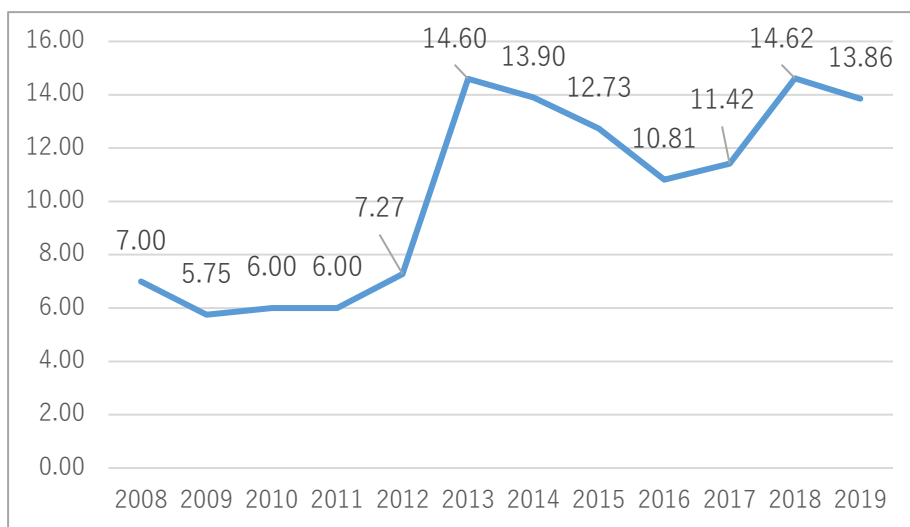


図3 プログラムあたりの平均参加学生数（延べ人数ベース）

また、図4に示すように、プログラム数および定員規模が拡大したことにより6期生以降、参加者数は飛躍的に増加している。特に12、13期生は来年度以降も新たに学生が参加する可能性があるため、この傾向はより顕著になると予測される。

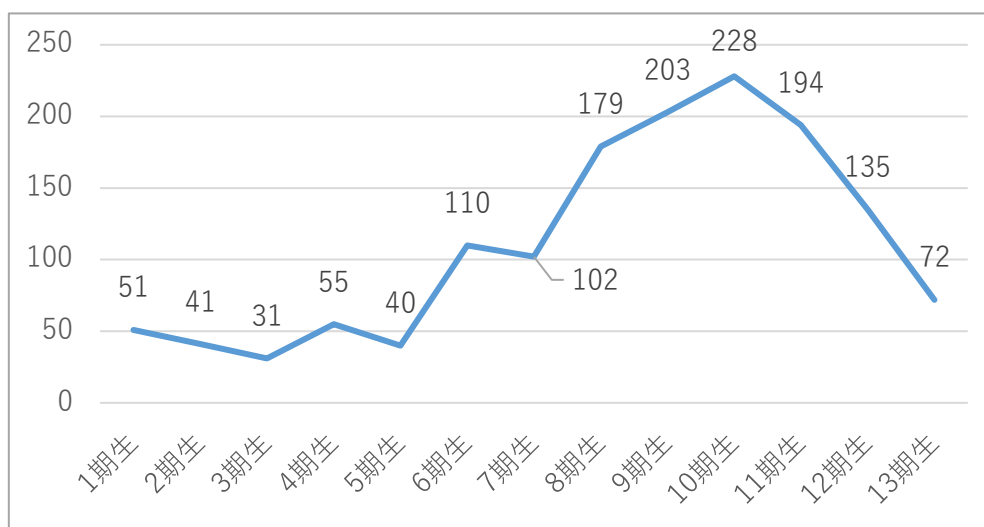


図4 期生ごとの参加者数の推移

以上のように、開始から12年が経過した本プログラムは、参加学生数ならびにプログラム数が安定していることから、参加学生および地域からのニーズを汲み取った活動が展開されているとみることができるといえる。しかしながら、今後も継続的に本プログラムを実施するにあたっては、それぞれの取り組みの質の向上と学生自身が学びをより深めることができるプログラムを提供することが求められている。

（文責：観光実践教育サポートオフィス 藤井 至）

2. 2019年度LIP活動報告

2019年度は、14プログラムが実施され、延べ194名の学生が地域で活動を行った。以下に示すのが今年度の実施プログラムの一覧である。

No	地域名	テーマ	参加 学生数
1	岩出市	ねごろ歴史の丘巡りスタンプラリー帳作成	10
2	紀の川市	紀の川スイーツの開発	12
3	紀美野町	地区×学生による観光・文化・交流情報発信と棚田の再生	21
4	紀美野町	世代間交流を推進する地域拠点の企画・運営 (コミュニティカフェ等での実践を通じて)	11
5	有田市	箕島の魅力発信	6
6	広川町	津木地区寄合会の運営、特産品開発、情報発信、イベントを共に考える	14
7	上富田町	笑顔が広がる美しい里づくり	2
8	那智勝浦町	地域の文化や風習の体験、獣害対策、農作業、冊子作りを通じて地域の方々と触れ合い、地域・自分・社会のあり方・つながり方を考える	4
9	和歌山県全域	「ねんりんピック紀の国わかやま2019」における、観光ツアー同行を通じた観光業務の実践	11
10	大阪府阪南市	地方創生にかかる地場産物商品に関する調査・研究、デザイン考案等	10
11	*有田川町	学生との協働による継続的な棚田保全活動(棚田ふあむ)	32
12	*日高川町およびかつらぎ町	「体験教育旅行&夏学習～都会と大自然の出会い」	15
13	*美浜町	カナダミュージアムにおけるミュージアム機能の強化	12
14	*岩手県胆江地方および和歌山県	農村ワーキングホリデーを活用した都市農村交流の「鏡効果」と農村再生手法としての可能性の検証	33

※*は申請タイプのプログラム



和歌山県岩出市

ねごろ歴史の丘巡りスタンプラリー帳作成



【地域の基礎データ】

人口：53,969人（令和2年1月末現在）

高齢化率：22.4%（平成31年1月1日現在）

産業：製造業、農業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：10名（1回生：4名、2回生：6名）

活動期間：平成30年5月～

担当教員：永井隼人

1. 活動実施の経緯

和歌山県岩出市は根来寺や和歌山県植物公園緑花センターなどを有し、また近年では道の駅ねごろ歴史の丘を中心に観光振興に力を入れている。しかし、観光客の市内での滞在時間が短いこと等が課題となっている。そこで、岩出市産業振興課、ねごろ歴史の丘管理協会と連携し、岩出市の抱える課題に取り組むこととなった。

2. 活動の内容

参加学生はまず岩出市を訪問し、根来寺や道の駅ねごろ歴史の丘など市内の主要施設の見学を行った。その後、道の駅の利用実態を把握することを目的に、2019年7～9月に同施設にて利用者実態調査を実施した。調査の結果、道の駅利用者の多くが周辺施設に立ち寄っていないことが明らかになったことから、市内での周遊を促す企画として11月23日に開催された紀州根来寺かくばん祭り当日に、道の駅ねごろ歴史の丘と和歌山県植物公園緑花センターの両施設を結ぶスタンプラリーを企画した。当日は134名(組)の方が両施設を利用し、スタンプラリーを達成した。2019年12月9日には旧和歌山県議会議事堂(一乗閣)にて本年度の岩出市LIP活動報告会を実施し、スタンプラリーの結果報告や今後の課題などについて本LIP関係者との意見交換を実施した。

3. 活動を通じて

本年度の岩出市LIPでは、学生自らが調査を実施し、その調査結果を基にスタンプラリーの企画・運営を行った。LIP活動には地域の方々から多くの支援を頂き、参加学生は地域の方々と連携しながら地域の課題を学ぶという貴重な経験を得ることが出来た。

4. 成果物など

地域インターンシッププログラム（LIP）和歌山大学観光学部×和歌山県岩出市

ねごろ歴史の丘巡りスタンプラリー帳作成

井上巧稀 植田晴香 柏木美咲 出井敬太 畑島郁海 樹竹葉々美 飯岡理子 平井冨佳 藤次光咲 細見楓

🔍 岩出市について

岩出市は、和歌山県北部に位置する市。
面積約 38.5 km²、人口はおよそ 54,000 人。
根来寺や緑花センターなどを有する他、道の駅「ねごろ歴史の丘」を中心に観光振興に力を入れているが、都市部で働く人たちのベッドタウンと化している側面も見られ、地域への愛着や地元の見どころを知る人が少ない・・・。

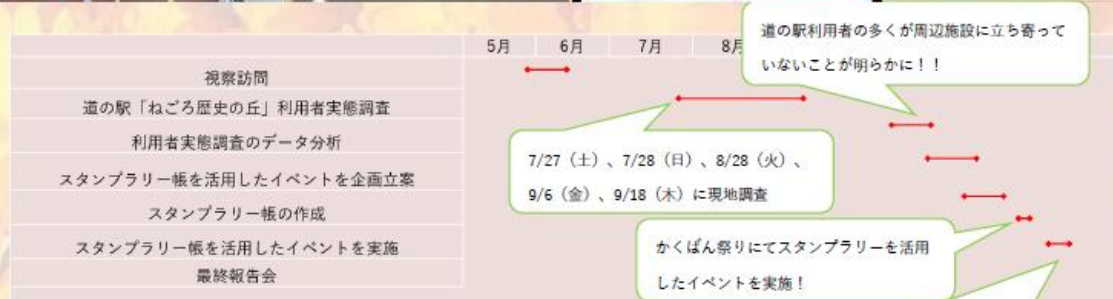


目的：岩出市根来地域での滞在時間を延ばし、観光スポットを周遊してもらうこと

活動期間：2019年5月～12月 岩出市への訪問



🌸 活動内容



11月24日に行われたかくばん祭で行ったスタンプラリーでは参加者210人中134人がスタンプラリー達成！お花の苗をプレゼントしました！

in 旧和歌山県議会議事堂（一乗閣）（12月9日）
本LIP関係者の前で本年度の岩出市LIP活動報告会を実施

12月9日に一乗閣で行われた報告会で今回の成果をご協力頂いた皆さんの前で発表しました。皆さん喜んで下さって嬉しかったです！



和歌山県紀の川市

紀の川スイーツの開発



【地域の基礎データ】

人口：61,813人（令和元年12月末現在）

高齢化率：31.6%（平成31年1月1日現在）

産業：農業（桃・柿・キウイ・いちじく）など

【活動の基本情報】

参加学生数：12名（1回生：4名、2回生：8名）

活動期間：平成30年5月～

担当教員：竹田明弘

1. 活動実施の経緯

紀の川市は、もも、イチゴ、はっさくなど県内屈指のフルーツ王国としての顔を持っている。これら紀の川市の一連の活動を考慮し、本活動ではフルーツを使用したスイーツを開発することで、紀の川市に貢献することを目的として実施された。

2. 活動の内容

具体的な活動内容は、MAISON FLEURIR(以下 FLEURIR)、Café sweets Sablier(以下：Sablier)、レストラン・ブラン・メゾン(以下：ブランメゾン)の3店舗のそれぞれと共同で顧客評価の高いスイーツを開発販売することである。

本年度は、スイーツプロジェクトの2年目であり、1回生(及び2回生1人)も新たにメンバーに加わったことから、年度前期は新しく加わったメンバーと、継続参加のメンバーは異なる活動を行い、年度後期からメンバーが合流するという方法で活動を運営した。

活動の結果、FLEURIRにおいてイチジクを用いたスイーツ3品、Sablierにおいてクリスマス限定のランチデザート、ブランメゾンにおいてキウイを用いたスイーツ1品が開発・販売された。また、次年度は、小売業で販売するスイーツの開発を目指しており、その打合せも活動期間内に並行して実施した。

3. 活動を通じて

紀の川市役所、FLEURIR、Sablier、レストラン・ブラン・メゾンの協力により、活動は比較的順調に進行した。今年度は、紀の川市役所のLIP担当職員(北野氏、井上氏)も学生ミーティングに一部参加していただいた。

今年度はミーティング、ならびに協力店舗との打合せの日程を調整することが困難であった。次年度は、日程の調整と計画的な実施に加えて、開発後商品の売り上げの推移などその後の分析について課題としたい。

4. 成果物など

紀の川市 H P より

紀の川市とは？

紀の川市は山々に囲まれ、貴志川や紀の川からの豊富な水資源と温暖な気候を生かして野菜、果物など多種多様な農作物を生産している。農業産出額全体では和歌山県内1位を誇り、トップブランド「あら川の桃」をはじめ、はっさく、いちじく、柿、キウイフルーツ、いちごなど四季折々の果物が収穫できる全国有数の果物産地である。また紀の川市の総人口は62616人で、そのうち農業就業者数は全体の18.2%と多くの人々が農業に携わっている。

事前調査

- ・ Spss調査：統計ソフトを使用し人気商品の共通点を分析
- ・ アンケート調査：和歌山大学の学生や紀の川市役所の職員に協力していただき実施
- ・ 事例調査：関西圏の人気スイーツ店へ行き自分たちで共通点を見つける

紀の川 L I P

このL I Pの活動目的

紀の川市の人口減少問題・若者流出に歯止めをかけるべく、【紀の川市＝フルーツの町】というイメージを活用。市内にあるカフェ・スイーツ店と提携しスイーツの共同開発。提携店舗が紀の川市民にとって新たな憩いの場・コミュニティ形成の場になるように願いを込めて活動している。

具体的な活動内容

ナチュラル

～2019年度～
キウイや八朔をメインに使った紀の川市らしいスイーツを複数考案。その中からキウイのパパロアが採用され、商品化された。当初の予定とは異なる大幅な変更などもあったが、学生らしい機転をきかせて商品化に至る。

フルリール

～2018年度の活動～
イチゴとドライフルーツを使ったクグロフを開発。ナッツやピスタチオも用いることで、異食感も感じられるようにした。
～2019年度の活動～
3つの案を提案した。試行錯誤を重ねた結果、旬のフルーツであるイチヂク、マスカット、巨峰を使った3品が完成した。

サブリエ

～2019年度の活動～
クリスマスランチのデザートプレートメニューの開発に携わった。リース案、聖書案、ツリー案の3案を提案させていただいた。何度も原案を修正した結果、クリスマスらしいリース案が完成。サブリエさんも、私たちも今回はSNSなどでの宣伝にも励んだ。

課題

時間が足りずうまく調査を活かし切れていなかったり、スイーツ開発によって紀の川市が発展しているのか分からない。そのためスイーツ発売後の客数の推移を集計する時間も設けたり、事後学習を充実させてもよいのではと感じた。

和歌山県海草郡紀美野町

地区×学生による観光・文化・交流情報発信と棚田の再生



【地域の基礎データ】

人口：8,967人（平成30年9月末現在）

高齢化率：41.4%（平成27年1月1日現在）

産業：棕櫚製品製造業、農業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：21名（1回生：6名、2回生：4名、3回生：6名、4回生：5名）

活動期間：平成30年4月～

担当教員：佐野楓

1. 活動実施の経緯

2017年度まで4年間に渡り、紀美野町の上神野地区で発動してきたこのLIPは、昨年度から地域を新たに紀美野町の小川地区で活動を進めてきた。本LIPは新しいメンバーを加えて、2019年6月に小川の郷づくり会さんと顔合わせをした後に、本格的に活動をスタートした。また、今年度からFacebook、InstagramとTwitterの3つのSNSを開設して、小川地区の魅力やLIPの活動状況などを積極的に発信していた。

2. 活動の内容

本LIPは2019年6月からほぼ毎月活動に取り組んできて来た。具体的には、6月に小川の郷づくり会さんと顔合わせ、活動を紹介した。7月に街歩きを実施した。9月に、冬まつり企画会議を開始し、より盛り上がるイベントの企画について小川地区の方と意見を交わした。また、小川小学校運動会に参加した。10月に、冬まつり企画会議を続いて、11月の生石山登山を実施し、風の森宿泊体験を行った。11月に生石山登山整備活動に参加し、12月の冬まつり企画会議を引き続き実施した。12月に小川の郷の冬まつりイルミネーション準備と冬まつり運営に携わってきた。

3. 活動を通じて

今年の本LIPは新たな試みを色々していた。例えば、小川地区の方々により顔と名前を覚えてもらうために、小川地区をモチーフにしたネームカードを作成した。本活動を通じて、小川地区の観光・文化などを発信できただけでなく、メンバー間の情報を共有したり、メンバーの親睦を深めたりすることもできた。

4. 成果物など

和歌山大学観光学部 紀美野町小川 LIP

ここが私の
アナザースカイ。

ここには載りきれない活動写真
真をスライドショーにまとめ
ました。QRコードから是非
ご覧ください！



【2019年度 活動内容】

- ・紀美野町小川地区の街歩き
- ・古民家を改修した「風の森」で宿泊体験
- ・生石高原登頂
- ・小川地区小学校運動会の運営
- ・登山道整備
- ・イルミネーションや竹灯籠の設置
- ・冬まつりの運営
- ・SNSでの情報発信

【活動目的】

冬まつりの企画・運営への参加や学生の視点での、生石高原を中心とした小川地区の観光客誘致・PR、活性化です。また、たくさん足を運んで小川地区のことを知り、「最高の魅力」を発見することも目標に掲げています。

【小川の直売所】
第1・3日曜日に地元の産物が並ぶ小川の直売所。

【主な活動場所】

- ・風の森
生石高原のふもとにある宿泊施設。車の往来が少ない集落にあるため静かな時間を過ごすことができます。
- ・小川小学校
地元の小学校で運動会や冬まつりなどたくさんの行事を行います。

何度も小川に行つて会議をしました。1回生はカラオケの司会をし、上回生は屋台運営と会場受付をしました。学生企画では子供達と触れ合うことができました。メインのイルミネーションは地区と学生が丸となって作り上げました。

普段は関わることでできない小川の方々とでありことができ、より小川が大好きになりました。

小川の郷 冬まつり

山頂で食べたおにぎりの美味しさは特別な思い出になりました。

生石高原

「風の森」という古民家に宿泊した翌日、生石山へ出発しました。急な坂道や滑りやすい道などたくさんの障害がありました。約3時間かかって生石高原に到着したときは、皆自然と笑顔になり、嬉しさや喜びがこみあげてきました。

SNSでも待っています！

Twitter



Facebook



Instagram



紀美野町小川の郷づくり会

和歌山県海草郡紀美野町

世代間交流を推進する地域拠点の企画・運営 (コミュニティカフェ等での実践を通じて)



【地域の基礎データ】

人口：8,746人（令和元年9月末現在）

高齢化率：45.4%（平成31年1月1日現在）

産業：棕櫚製品製造業、農業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：11名（1回生：4名、2回生：3名、3回生：2名、4回生：2名）

活動期間：平成27年4月～

担当教員：藤井至

1. 活動実施の経緯

紀美野町では、平成27年度より、認知症当事者やその家族、地域住民、行政職員、社協職員等が気軽に集い、交流することを目的に、コミュニティカフェ「きみの*にco cafe（以下、にこカフェ）」を開催している。このカフェは、町内のコミュニティカフェを活用して月に一度実施されるもので、年齢、性別を問わず多様な人々がカフェを訪れることで、認知症当事者やその家族に楽しみや安らぎを与えるとともに、カフェ参加者の認知症への理解が促進されることが期待されている。本プログラムにおいては、にこカフェの取り組みを中心としながらも、少子高齢化の進行している紀美野町において貴重な世代間交流の場をいかにして作り上げることができるか。また、既存の世代間交流の場をいかにして、維持・運営していくことができるのかについて考えることをねらいとしている。

2. 活動の内容

本プログラムにおける学生の主な活動内容は以下の通りである。活動によっては、イベントの企画自体から関わっているものもあるが、当日の支援のみの活動もある。

- ・認知症サポーター養成講座：認知症や紀美野町に関する知識を身につけるべく実施
- ・にこカフェ（毎月第4金曜日）：運営サポートと秋祭りの企画・運営など
- ・ふれあい昼食会（毎月第3土曜日）：運営サポートとメニュー等の提案など
- ・こども食堂（キノコ食堂）（毎月第2金曜日）：運営サポートと親子向け企画の実施など
- ・地域活動訪問と観光資源聞き取り：サロンの訪問と観光資源のヒアリング・訪問など

3. 活動を通じて

イベント等の企画においては、世代問わず親子で楽しめる企画や紀美野町ならではの企画を実施するべく、毎週一回会議を行い検討してきた。イベント参加者からは、好評を得ることができ、大変良い活動であった。しかし、活動間の連携による世代間交流の場の創出までは至らず、地域活動間連携の難しさを感じた。この点は、今後の課題としたい。

4. 成果物など

NICO CAFÉ LIP

テーマ；世代間交流を促進する地域拠点（コミュニティカフェ）の企画・運営

活動地域；和歌山県海草郡紀美野町（吉見地区）

2019年度メンバー；1回生4人 2回生3人 3回生2人 4回生2人

【にこカフェLIPについて】

にこカフェLIPは和歌山県の紀美野町を拠点に活動しています。主な活動内容としては、紀美野町で開かれているコミュニティカフェであるにこcaféに参加し、地域の方々と交流しています。高齢者施設からも遊びに来てくれるので、認知症サポーター養成講座を受講し、接し方を学んでいます。それだけでなく、ふれあい昼食会やキノコ食堂にも参加してごどもからお年寄りまで幅広い年齢層の方々と交流を通して、世代間交流の促進に努めています。

2019年度の活動

コミュニティカフェ にこcafé（一回生 早坂奈々）

認知症カフェ「にこcafé」では、紀美野町在住のお年寄りや、サービスに通っておられる方やお茶やお菓子を囲んでお話をします。その傍には、いっしょに絵を描いたり、編み物をしながらコミュニケーションを取りました。認知症はもちろん見目で判断できないものなので、「どこからきたの？」と何度も同じことを質問されるまで、全く気づくことができませんでした。最初は戸惑ってしまいましたが、認知症の方のように接するべきなのかわからなかったのですが、笑顔で相手をしながらお話を聞くと、案外そうに喋ってくださってうれい気持ちになりました。また、私は編み物をしたことがなかったので、お年寄りの方からそのような知識を得られる良い機会でした。2019年度は「にこcafé」で秋祭りを行いました。たくさんのお年寄り・お年寄り・私たち大学生が集まり、まさに世代間交流の場になりました。



にこcafé 秋祭り（三回生 本田侑子）

例年、にこcaféを開催している「ふれあい広場紀美野」で夏祭りを行なっているのですが、今年は秋祭りをし、季節を感じられるイベントで皆さん楽しんでくださいました。今回のイベントでは、普段にこcaféにいっしょにお年寄りの方々と近くの保育園に通っている園児さん、私たち大学生で集まり、絵葉書作りと秋にちなんだクイズ大会をしました。絵葉書作りでは、皆さん思いの絵を描き楽しんでうれしや、家に帰って「両親にプレゼントする！」と書いていた園児さんもいました。クイズ大会は、秋についての知識が増え私自身勉強になりました。最後には園児さんから歌のプレゼントがあり、歌を聞いたお年寄りの方々で感動して泣かれていた方もいらっしゃいました。イベント中には、地域の方と大学生との交流はもちろんですが、お年寄りの方と園児さんで会話をしている場面が何度も見られ、私は有意義な世代間交流の場になったのではないかなと感じました。これからも、地域外で生活している 私たちの独自の目線から、紀美野町の方々とサポートできたら嬉しいです。



ふれあい昼食会（二回生 杉本梓）

ふれあい昼食会は、にこcaféを開催している「ふれあい広場紀美野」で月に1度開催されている昼食会です。ふれあい広場紀美野の運営をして下さっている方々がお料理をしてくださるので、私たち大学生は洗いや片付け、片側に料理を手伝ったりしています。参加者の方が来られると、みんなで1つのテーブルを囲んでお話しながらご飯を食べます。お料理はいつも美味しく、紀美野町のおばあちゃんやおじいちゃんとお話をしている時、私たちまで元気をもらえるくらい皆さんパワフルで、昔の思い出など、私たちが知らないことをたくさん教えてくださいました。私は、一回生の頃から、このふれあい広場紀美野においでして、二回生になるとだんだん皆さん顔を覚えてくださり、気さくに話しかけてくださることが本当に嬉しいです。いつも元気をいただいている私たちが、紀美野町の方に毎月の楽しみをこの場で提供できるように、これからも頑張りたいと考えています。

キノコ食堂（一回生 谷口紗彩）

紀美野町では、毎月第2金曜日にこども食堂が開催されています。キノコ食堂とは、「き」み「の」「こ」ども食堂から名前がつけられています。ここでは、地域の子どもやその家族を始めとした地域の住民に晩ご飯を提供しています。私たちは、主に料理の盛り付けや配膳のお手伝いしながら地域の方や高校生のボランティアの子達との交流を深めました。食事を通して、この場所は世代間交流、お母さん方の情報 交流の場になっていると感じました。また、食事を終えた子どもたちが退席しないように、楽しい思い出を作ってもらえるようにとコースター作りも行いました。紀美野町で集めた木材を薄く円型に切り、そこに絵を描いてもらったり、シールを貼ってもらったりしながら、材料にも こだわったコースターを作ることが出来ました。準備は大変でしたが、「楽しかった。」と沢山の子どもたちが喜んでくれてやがたを感じました。



夏合宿（二回生 杉本梓）

今年度の9月には、念願の合宿を1泊2日で行いました。紀美野町のみさと天文台よりさらに標高が高いところにあるお家で宿泊させていただきました。1日目の夜はいつもお世話になっている、ふれあい広場紀美野の方やそのご家族、知り合いの方も来られてみんなでバーベキューをしてお話をさせてくださいました。2日目は、役場で紀美野町に隣接する隣町を訪ねたり紀美野町で行われている「いきいき百歳体操」という体を効果的に動かす運動に学生も参加して体験させていただきました。きれいな星を見ながら印刷したり、紀美野町の町を回ってどんなところなのか知ることができた貴重な機会でした。



和歌山県有田市

箕島の魅力発信



【地域の基礎データ】

人口：27,736人（令和2年1月1日現在）

高齢化率：33.0%（平成31年1月1日現在）

産業：農業（みかん）、漁業（太刀魚）、工業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：6名（1回生：3名、2回生：3名）

活動期間：平成29年6月～

担当教員：藤井至

1. 活動実施の経緯

有田市では、「箕島地区の魅力を子供たちに伝える」をテーマにこれまで二年間活動をしてきた。しかしながら、昨年度までの取り組みを通じた課題として「イベント運営などを通じて得た知見、経験、そして地域とのつながりを大切にしながら、同地域における多世代交流をさらに推し進めるような活動」の必要性があげられていた。そこで、今年度の活動については、これまで取り組んできた子供たちに魅力を伝えるという「箕島っ子集会（箕島小生を対象としたワークショップ）」の企画・運営には引き続き取り組み、あわせて、箕島地区のこれからを考える活動団体である「ワンハート」と協力をして多世代間交流を目指すこととなった。

2. 活動の内容

学生たちが行った活動は以下の通りであるが、イベント当日のお手伝い的に関わるのではなく、会議や準備、反省会にも出席するなど、「過程」に参加することを重視した。

- ・有田市社会福祉協議会へのヒアリング：有田市・箕島地区の現状を知る
- ・みのしまふれあいまつり：地域の祭りの復活。企画・運営の会議出席、当日の運営など
- ・グルメフォトチャレンジ：有田市うまいもん祭り企画の当日運営支援
- ・箕島っ子集会：地元特産品を活用したお弁当作りワークショップを企画・運営
- ・箕島駅前イルミネーション：企画・運営の会議出席、設置のサポートなど

3. 活動を通じて

ワンハートの活動に参加したことで出来た地域とのつながりを活かしながら箕島っ子集会を企画・運営するなど、イベント間の連結性を考えながら活動できていた。また、みのしまふれあいまつりでは、多世代の地域住民の方々が参加されたことで、地域の誇りを醸成する場としての祭りの重要性についても学び取ることができた。ただし、箕島の魅力発信というテーマに沿った発信コンテンツの作成や、実際に祭りの復活が地域にどのような影響を与えたかの実態調査等は実施できなかったため、それらは今後の課題としたい。

4. 成果物など

有田市LIP



有田市
和歌山県

【有田市とは】

和歌山県の北西に位置しており、海、山、川に囲まれた自然豊かな土地です。
人口は約3万人。みかんに加え、みかん鶏や太刀魚、しらすなどが
特産品として挙げられます。主な観光地は地ノ島や有田みかん街道！



有田市LIPは、ここ有田市の箕島地区を中心に
活動を行いました。

【活動目的】

『多世代交流を通して見つけた魅力発信』

前年までの活動の反省点として、子供達との交流に限定していた部分があり、今年度は、
子供からお年寄りまで幅広い世代の人と関わりながら魅力を見つけ、発信しようと考えました。

【活動報告】

多世代交流を目的に地域のイベントやワンハート(商店街を盛り上げるために「今も昔もよかった」
をテーマとし地域活動を行う団体)の活動に参加し、地域の方々と交流を行いました。



みのしまふれあいまつり
企画・運営に携わり
箕島クイズコーナーを
地元高校生と担当



駅前イルミネーション
ワンハートの方と一緒に
箕島駅前のイルミネー
ションを企画し設置



**グルメフォト
チャレンジ**
初企画のイベントの
運営



第4回みのしまっ子集会
有田市の特産品を使った
お弁当作りとワークショップ
企画・運営



私たちが見つけた箕島の**魅力**

○箕島の人たちの**箕島愛**

自分たちの町への誇りを持ち、街を活
性化させようと動く熱い思いをかんじ
ました。

○箕島の人たちの**つながりの深さ**

町の人なら名前を出せばみんながわか
る。何かあればみんなで協力。外から
来た私たちにもわかる暖かさを感じま
した。

反省 → 来年度に向けて

今年度は地域の方との交流も増え、
たくさんの方にこの団体を認知して
いただけたと感じています。

今回の反省を活かした**来年度の目標**は

- ・ **具体的目標**を設定し、
達成度を測れるようにする
- ・ イベントに対して**実際起きるかも**
しれないことを想定して行動する

来年度はさらに幅広く地域の方のため
になることをしていきたいと思ひます。

和歌山県有田郡広川町

津木地区寄合会の運営、特産品開発、情報発信、イベントを共に考える



【地域の基礎データ】

人口：6,943 人（令和元年 12 月末現在）

高齢化率：32.9%（平成 31 年 1 月 1 日現在）

産業：農林業、漁業、製造業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：14 名（1 回生：4 名、2 回生：4 名、3 回生：4 名、4 回生：2 名）

活動期間：平成 26 年 6 月～

担当教員：永瀬節治

1. 活動実施の経緯

本 LIP では、広川町津木地区の活性化に取り組む津木地区寄合会（以下、寄合会）の活動を平成 26 年度より支援している。これまでに、「ツギー谷のお花畑」におけるイベントの企画運営や、地域内外の出店イベントでの加工品の販売などを、寄合会と連携しながら実践してきた。また昨年度からは、日本遺産「百世の安堵 ～津波と復興の記憶が生きる広川の防災遺産～」の認定を契機に、広川町の中心部にあたる広地区での活動にも参画している。

2. 活動の内容

今年度は津木地区の活動拠点である「ツギー谷のお花畑」が一昨年の台風被害や施設の老朽化により使用できない状態となり、8 月の合宿の他は津木地区外での活動が中心となったが、毎週定期的にミーティングを行いながら、新たな取り組みを検討した。

広川町ふるさと祭り、市駅“グリーングリーン”プロジェクト、大学祭での出店を継続するとともに、今年度は 10 月の「稲むらの火祭り」で使用する稲むらづくりにも参加した。また 11 月には、広川町の日本遺産の魅力を発信する古民家体験イベントの一環として、浜口梧陵ゆかりの歴史的建造物「耐久社」において、津木地区の特産品（お茶、鯖めし）や町内のベーカリーの商品を活用した「耐久かふえ」の運営にも新たに取り組んだ。

3. 活動を通じて

6 年目を迎える本 LIP では、新たな取り組みが開始される一方で、本来の拠点である津木地区での活動のあり方が課題となっている。お花畑は来年度から再開される予定であり、3 月の報告会等で寄合会関係者と意見交換を行いながら、今後の活動の方向性を見定めたい。

4. 成果物など



和歌山大学観光学部 広川町 Local Internship Program — 津木地区寄合会の運営、特産品開発、情報発信、イベントを共に考える —



広川LIPの活動について

私たち広川町LIPは、広川町津木地区の「魅力発見」と「魅力発信」を目的に活動しています。津木地区寄合会の方々と連携して2014年から活動を続けています。今年で6年目になる広川町LIPは、今年度は1回生2名、2回生4名、3回生4名、4回生3名の計13名で活動に取り組んできました。主な活動内容としては、広川町で行われている行事への参加や、広川町や津木地区のPR・特産品販売です。これらの学外での活動以外に、広川町への理解を深めLIPの活動をより良いものにするため学内で毎週会議を行っています。

Where is Hirogawa town?



広川町は和歌山県中部に位置し、海・山・川という自然に恵まれた地域です。観光客は、春は桜、初夏にはホテルの美しい光景を眺め訪れます。沿岸の地域は、津波防災に関する「稲むらの火」や濱口梧陵ゆかりの地として知られており、近年は「日本遺産」に認定され、注目を集めています。

2019年度 スケジュール

- 5.25 津木地区訪問
- 6.26 津木地区総会に出席
- 8.21-22 夏合宿
- 10.14 稲むらの火祭り 準備
- 10.19 稲むらの火祭り
- 10.22 市駅GPPで出店
- 11.4 広川町ふるさと祭り
- 11.16 耐久かふえ
- 11.23 大学祭で特産品販売
- 3月 津木地区で活動報告会

2019年度活動報告

夏合宿 広川町津木地区への理解やメンバー・地域の方との親睦を深めるために、広川町の農家民泊を利用して合宿を行いました。一日目の昼は、広川町にある文化財「耐久社」の見学、夜には「プライベートバー津木」で交流会を行いました。交流会では地域の方や行政の方に参加していただきました。二日目は民泊でお世話になった方のもとで農作業の体験をしました。交流を通して地域の方々が持つ広川町への熱い思いを知り、私たちLIPは地域のために自分たちができることから取り組んでいこうという思いを一つにしました。



左：『夏合宿 プライベートバー津木』 / 右：『稲むらづくり』

稲むらづくり 安政大地震によって広村を津波が襲った際に、稲むらに火を放ち村人を避難させたという濱口梧陵の物語があります。広川町では、この濱口梧陵の功績を称え継承するとともに、市民の防災意識を高めるために、「稲むらの火祭り」を開催しています。昨年度は参加するのみでしたが、今年度は祭りの準備にも携わることができました。稲むらは燃えやすいように改良されており、精密に作られた設計図のもと作っていただきました。祭りを担う人々が、高齢化が進み若い人の力が少ないためこのような準備も一苦勞だという地元の方のお話を聞きました。地域のイベントを支える活動として来年以降も続けていきたいと考えています。

耐久かふえ 2019年11月に広川町で開催された、吉良家体験イベントにおいてイベント限定のカフェを行いました。夏合宿で見学した奥指定史跡の文化財である「耐久社」を使って行いました。普段は開放されていない内部を知ってもらうことと共に、広川町や津木地区の特産品をPRすることを目的に行いました。広川町のバン屋さんや運搬し名物のおげパンや、津木地区寄合会の特産品であるサバ飯と薬草茶の販売を行いました。SNS等による宣伝により客足が伸び、たくさんのお客さんに来ていただくことができました。様々な課題も残りましたが、広川町役場の方と連携して行うことができたことや、イベント企画運営を一から自分たちでできたことは、とても貴重な経験になりました。



左：『耐久かふえ』 / 右：『市駅GPPの出店ブース』

市駅GPP出店 南海和歌山市駅近くの紀の川河川敷で行われた市駅GPP（“グリーングリーン”プロジェクト）で出店しました。今年度は地域の特産品販売だけでなく、体験ブースでシャボン玉アート体験を行いました。内容は、大きなシャボン玉づくり体験と色付シャボン玉を使った果づくり体験で、たくさんのお客さんが楽しんでくれました。さらに、津木地区のことを少しでも知ってもらえるよう、パネルも設置しました。自分たちが津木地区について知っていることをお客さんに伝えることで、多くの人が津木地区について興味を持ってくださいました。

Instagram : @hirogawa_lip #inamura_fire



和歌山県西牟婁郡上富田町

笑顔が広がる美しい里づくり



【地域の基礎データ】

人口：15,563人（令和元年12月末現在）

高齢化率：26.3%（平成31年1月1日現在）

産業：農業（ウメ・みかん）、製造業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：2名（1回生：1名、2回生：1名）

活動期間：平成29年5月～

担当教員：大浦由美

1. 活動実施の経緯

市ノ瀬地区は富田川左岸に位置する緩やかな丘陵地で、地区内には上富田町唯一の棚田が存在する風光明媚な地域である。しかしながら農業者の高齢化が進み、耕作放棄地も一部にみられる。その一方で、非農家世帯も増加しており、いわゆる「混住化」が進んでいる地域でもある。当地区では2016年秋に地域住民による地域づくりワークショップを実施した。その場に観光学部生3名が参加したことをきっかけに、2017年から当地区の農業者を中心に結成された「一瀬里山会」の地域づくり活動を支援することになった。

2. 活動の内容と成果

この間、以下の3つの活動を継続的に支援している。今年の活動状況は次の通りである。

(1) ヒマワリと菜の花が咲きほこるまち

今年度も台風や天候不順に見舞われ、ヒマワリ等が十分に生育しなかった。休耕地の有効活用が目的であるが、耕起や草刈りに手間がかかるため、省力化が課題となっている。

(2) アサギマダラが飛翔するまち

興禅寺下の休耕地を活用したフジバカマ園において、アサギマダラの飛来に合わせて初のイベント「アサギマダラ祭り」を開催し、多くの参加者を集めた。

(3) 市ノ瀬ごませんべいづくり

「市ノ瀬ごませんべい」の品質向上に努め、今年も地区の祭りやイベントで販売した。今後は、当地の土地特性（休耕地）に合ったゴマの効率的な栽培方法の確立が課題である。

3. 活動を通じて

3年間の活動によって軌道に乗りつつある取り組みもあるものの、休耕地は増加の傾向にあり、活動自体の人手不足が課題になりつつある。今後は非農家世帯の住民にも声を掛けるなど、一瀬里山会の活動への参加者・協力者を増やす必要があるだろう。

4. 成果物など



笑顔が広がる美しい里づくり

～2019年度 上富田町市ノ瀬LIP

一瀬里山会

●市ノ瀬地区の概要と現状●

市ノ瀬地区は和歌山県西牟婁郡上富田町内の緩やかな丘陵地に位置し、富田川という清流が流れる集落です。熊野古道・中辺路街道の入口付近であることから、「口熊野」とも称される地域です。

産業としてウメやミカンなど農産物が生産されていますが、農業の担い手は年々高齢化が進んでおり、それに伴って耕作放棄地が増加する等「農地の継承」という問題を地域として抱えています。世帯別に見ても割合として非農家世帯が増加しており、農家・非農家の混住化がみられます。

●一瀬里山会と市ノ瀬LIPの成り立ち●

左に述べたような問題を抱えるなか、2016年に住民主導で地域活性化に向けたワークショップが開催されました。

結果として住民有志による地域づくり団体「一瀬里山会」が発足。また、このワークショップに観光学部生3名が参加したことから、2017年度より学部生がLIPプログラムとして市ノ瀬地区の地域づくりに加わる体制が整えられました。以後継続的に、里山会にLIPメンバーが参加する形で様々な活動を行っています。

＼里山会では、こんな活動をしています／



☆花々が咲き誇るまち☆

「花いっぱい運動」と称して、菜の花やひまわりを植栽する活動を行っています。良好な景観を形成するとともに、住民の心の豊かさにも貢献します。

今年度は植栽活動に加え、イベントの際にひまわりの種を頒布し、住民自体にもひまわりを育ててもらうという試みを行いました。頒布の際には、私達の活動を住民の方に広く知っていただくため、LIPメンバーが作成した里山会のパンフレットも添えてお渡ししました。



☆アサギマダラを呼ぼう☆

秋冬期になると日本列島から台湾・香港近辺まで移動する渡り蝶「アサギマダラ」は、美しい姿や希少性から愛好家も多い蝶です。一瀬里山会ではこれを地域資源にしようと、アサギマダラが好む花「フジバカマ」を植栽しました。

結果、前年度は想定を超える数のアサギマダラを集められたことから、今年度「アサギマダラ祭り」と銘打ったイベントを開催（※イベントの主催は別団体）。周辺地域の団体による露店や楽器演奏、自然観察指導員の方によるマーケティング教室が行われ、盛況となりました。



☆「いちのせのごま」づくり☆

休耕地・耕作放棄地活用の一環として、花卉類だけでなくゴマの栽培も行っています。収穫したゴマは地域の産品として売り出す事を目標とし、製品開発に取り組んでいます。今年度は「コスモス祭り」「アサギマダラ祭り」という2つの地域イベントで生ゴマとゴマゼンペいを販売し、価格や内容量の検討を行いました。LIPの活動としてはイベントの際のブース作成・製品販売や、ゴマゼンペいの製造などのお手伝いを行いました。

●今後の取り組みについて●

一瀬里山会では現在、「体験農園プログラム」の実施に向けて準備を進めています。体験農園とは、非農家の方が農作物のつくり方を学びながら実際に自分の手で耕作を行うシステムのこと。事前の知識や技術が要される貸し農園等とは違い、経験者でなくとも気軽に農業体験ができる手法だと注目を集めています。

構想は昨年度から立ち上がり、今年度は里山会メンバーが実際に和歌山市内の体験農園の視察を行いました。現在もLIPメンバーでナラシ作りに取り組むなど、来年度のプログラム開始を目指して活動しています。

●参加学生の声●

- ・様々な地域資源について考えさせられる活動でした。特に、地域イベントで地域の方々がお若男女問わず気軽に会話している様子を見て「繋がり」の大切さを感じました。（1回生 相川明音）
- ・今年度、何より一番印象的だったのはアサギマダラ祭りです。昨年度のアサギマダラの集まり具合を見て「これは凄い！」と思いましたが、今年度にイベント仕し住民の新しい交流の場となったことがとても感慨深いと感じました。（2回生 谷口真弘）

和歌山県東牟婁郡那智勝浦町

地域の文化や風習の体験、獣害対策、農作業、冊子作りを通じて地域の方々と触れ合い、地域・自分・社会のあり方・つながり方を考える



【地域の基礎データ】

人口：14,904人（令和2年1月1日現在）

高齢化率：41.7%（平成31年1月1日現在）

産業：林業、水産業、観光業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：4名（1回生：1名、2回生：3名）

活動期間：平成28年6月～

担当教員：八島雄士、岸上光克（食農総合研究所）

1. 活動実施の経緯

地域住民との交流や伝統行事、イベントなどへの参加を中心とした活動を行っています。なお、燦々会、宮祭り、現地報告会を、原則として全員参加とし、それ以外は個々に千葉さんと連絡して取り組む形で実施しています。

2. 活動の内容

- ①燦々会（7月15日）：住民コミュニティで地元の家庭料理を出し合い、みんなで食べながら語り合う伝承の場です。調理方法を学ぶほか、住民との会食で親睦が深まります。
- ②宮祭り（10月1日）：梶吉神社で行われる伝統行事。今年は、準備作業に参加しました。神社の清掃活動は住民の協働により行われており、神社の存在価値の高さを感じました。
- ③現地報告会（12月15日）：報告会を、学生が主体となって運営を行い、各自の振り返りや今後の活動に向けた方針を住民とディスカッションしました。
- ④個別の実施：(1)棚田での作業、(2)妙法展示会の見学、(3)地域行事への参加など

3. 活動を通じて

色川地区は移住者が多い地域であると知られていることに加え、棚田や狩猟などその地域の特性を活用したイベントが年間を通して開催されており、様々な学びの機会が提供されています。しかし、現地を訪れるための交通費が高価となる関係で、複数回現地を訪れることは難しいことが課題です。来年度は例年通り現地での活動を軸としてLIPの活動が地域の方の一助になるように取組みつつも、大学内での勉強会などの活動を増やし、学生の学びを更に深めることのできる環境を現地の方の協力の下で作っていくことで、活動をより活発化させていきたいと考えています。（2019年度リーダー：2回生・藤本 多敬）

4. 成果物など

那智勝浦LIP



2019メンバー
2回生 3人
1回生 1人

▶▶色川地区と小阪区の概要◀◀

小阪区は人口約30人の小さな地域ですが、他の地域には見られない伝統行事が数多くあり、伝統を大切にする意識が強く、また小阪区を含めた色川地区は移住者を多く受け入れている地域でもあります。地域には美しい棚田や段々畑があり、そこで特産品の色川茶も育てられています。

私たちは地域の行事への参加や、一人一人が活動目標を定めてそれぞれの軸で活動しています。

小阪区の行事(一部)

- ◆ 4月 ◆ 花祭り
- ◆ 5月 ◆ 棚田田植え
- ◆ 6月
- ◆ 7月 ◆ 棚田草刈り
◆ 燦々会(顔合わせ会)
- ◆ 8月 ◆ 道普請
◆ 施餓鬼
◆ 地藏盆
- ◆ 9月 ◆ 棚田稲刈り
◆ 宮掃除
- ◆ 10月 ◆ 宮祭り
◆ 亥の子祭り
- ◆ 11月 ◆ しめ縄作り
◆ 妙法展示会
- ◆ 12月 ◆ 出役(草刈り)
◆ LIP報告会
- ◆ 1月
- ◆ 2月 ◆ 大師講
◆ 水大師
- ◆ 3月

燦々会



宮祭り



稲刈り



妙法展示会



▶▶今後に向けての課題と実行案◀◀

- ◆ 学生がより参加しやすい環境を作る
- ◆ 伝統料理のレシピの保存・活用
 - ▷ポポロハスマーケットや和大祭で伝統料理や特産品などの販売
 - ▷レシピのデジタルデータを地域住民との交流に活用

和歌山県全域

「ねんりんピック紀の国わかやま 2019」における、 観光ツアー同行を通じた観光業務の実践



【地域の基礎データ】

人 口：923,721 人（令和元年 10 月 1 日現在）

高齢化率：32.0%（平成 31 年 1 月 1 日現在）

産 業：農林業、漁業、製造業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：11 名（1 回生：7 名、3 回生：4 名）

活 動 期 間：平成 30 年 5 月～

担 当 教 員：伊藤央二

1. 活動実施の経緯

令和元年 11 月 9 日～12 日に、和歌山県では 60 歳以上の方々が中心となってスポーツや文化などのイベントで交流を深める「ねんりんピック紀の国わかやま 2019」が開催された。和歌山県で全国規模のスポーツイベントが開催されるということで、主催団体の和歌山県福祉保健部福祉保健政策局ねんりんピック推進課と協力し、大会参加者に提供する観光ツアーを開発するという趣旨の基、2018 年度に「「ねんりんピック紀の国わかやま 2019」大会参加者に対する観光ツアーの開発」とテーマ設定した LIP を実施した。本 LIP はその LIP の継続であり、開発・考案したツアーをもとに、商品化された 4 つのうちの 2 つのプランについて、同行するという趣旨の基、「ねんりんピック紀の国わかやま 2019」における、観光ツアー同行を通じた観光業務の実践」とテーマ設定した LIP を実施することにした。

2. 活動の内容

ねんりんピック紀の国わかやま 2019 宿泊・輸送センター担当者と和歌山県ねんりんピック推進課の職員の方にねんりんピックや観光ツアー同行に関する講義を数回にわたり行っていただいた。夏休み中には、宿泊・輸送センター担当者と和歌山県ねんりんピック推進課の職員の方と同行ツアーの視察を実施した。「ねんりんピック紀の国わかやま 2019」開催中には、ツアー同行に加え、ツアー参加者への質問紙調査、大会ボランティアを行った。

3. 活動を通じて

上記の実践的な活動を通じ、参加学生の今後の学習意欲が高まった。また、ねんりんピック LIP で行ったツアー同行が、わかやま新報（2019 年 11 月 12 日付）の一面に「和大学生がおもてなし ねんりんピックで観光ツアー」といった記事が掲載された。

4. 成果物など



ねんりんピックLIP



きいちゃん

メンバー

3年生 4名
1年生 7名

活動内容

ねんりんピックとは？

「ねんりんピック」の愛称で親しまれている「全国健康福祉祭」は60歳以上の方々を中心とした健康と福祉の祭典です。令和初のねんりんピックは「あふれる情熱はじける笑顔」のテーマのもと、2019年11月9日から12日の4日間和歌山県で開催されました。

ねんりんピックLIPとは？

ねんりんピックLIPは「ねんりんピック紀の国わかやま2019」における、観光ツアー同行を通じた観光業務の実践をテーマとして活動しました。本年度のLIPでは昨年度考案した観光ツアーに実際に同行しました。観光ツアー同行までにツアーの概要把握、県庁職員や旅行会社の方々との打ち合わせなどを行いました。

ねんりんピック開会式ボランティア

場所: 紀三井寺陸上競技場 **担当:** 入退場ゲート **内容:** 出演者・選手の入退場補助、ゲート管理
入退場の際、手を振ってくださったり声をかけてくださったりする選手の皆さんを前に、私たちも笑顔で歓迎することができました。大会テーマである「あふれる情熱、はじける笑顔」を体現すべく、おもてなしの心をもって全国から集まる選手・役員の皆さまに接することができました！

和歌山城同行ツアー

日		程	
9:00	和歌山駅	9:10	和歌山城 (★わかやま歴史館・★天守閣・★紅葉深庭園)
11:00	★養翠園・★落碑殿	11:40	昼食：六三園
13:15	★紀三井寺	14:30	和歌山駅

凡例：==== 貸切バス ● 下車観光 ★ 入場観光 ■ 車中観光 【貸切バス会社名 中記バス】

高野山同行ツアー

日		程	
8:30	和歌山駅	9:30	★慈尊院
10:20	10:20	11:00	★丹生都比売神社
11:40	高野山 大門	11:40	昼食：一の観光センター・●中ノ儀・●典の院
15:00	★金剛峯寺	16:00	橋本駅
17:30	和歌山駅		

凡例：==== 貸切バス --- 徒歩 ● 下車観光 ★ 入場観光 ■ 車中観光 【貸切バス会社名 中記バス】



最初に和歌山城の工夫などの説明を受けながら天守閣まで登り、和歌山の景色を一望しました。その後、徳川家藩主らの養翠園と湊御殿に訪れ、西国三十三ヶ所第二番礼所である紀三井寺を参拝し、ご利益を授かってきました。個性的な語り部ガイドさんのもと、ねんりんピックに参加された方々と和歌山の名所を巡ることができました。



始めの慈尊院には長い階段があり、お年寄りには大変かなと思いましたが、多くの方が厳しい階段を登っていました。高野山に着くと小雨が降ってる中でのツアーでしたが、ねんりんピックの参加していた方達は元気いっぱい、こちら側が元気をもらったような気がします。帰りのバスでは自分の出身地についてそれぞれ語り合い、楽しい思い出を作ることができました。

全体の感想！

ねんりんピックの参加者は65歳以上の方々で、自分たちとは異なる年齢層のお客さんにどうやって満足していただくか、など多くのことを考えながら企画やツアーの下見を行いました。私たちは日頃観光学について学んでいますが、今回の様により実践的な体験ができることこそ、LIPの強みだと感じました！

大阪府阪南市

地方創生にかかる地場産物商品に関する調査・研究、デザイン考案等



【地域の基礎データ】

人 口：54,469 人（平成 31 年 1 月末現在）

高齢化率：28.7%（平成 27 年 1 月 1 日現在）

産 業：紡績業、漁業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：10 名（1 回生：4 名、2 回生：4 名、3 回生：2 名）

活 動 期 間：平成 30 年 6 月～

担 当 教 員：佐々木壮太郎

1. 活動実施の経緯

昨年度に引き続きの活動である。昨年度は最終報告会で新商品提案のプレゼンテーションを実施し、出席した事業者との交流もあったことから、今年度はヒアリング調査を含め、より深化した内容での活動を実施することとなった。

2. 活動の内容

①阪南市商工会会員へのヒアリング調査

昨年度は数多くの台風が関西地方を通過し、予定した事業所訪問をすべて断念する結果となった。幸い今年度はそのような事態もなく、計 5 社へのヒアリング調査を実施した。

②一般市民を対象としたアンケート調査

はんなん産業フェア（11 月 3 日、阪南市ぴちぴちビーチ）において、来訪者を対象としたアンケート調査を実施した。

③アイデア創出とプレゼンテーション

ヒアリング調査およびアンケート調査の結果概要と、それらにもとづくアイデア創出の結果を取りまとめ、阪南市商工会において最終報告会を実施した。

3. 活動を通じて

今年度の活動においては、事業所訪問を起点とした活動を実施することができ、最終報告会においても率直な意見・感想を伺うことができた。こうした現場の方々とのコミュニケーションの経験は、学生にとって貴重な機会であり、ぜひとも今後の大学生活に活かして欲しいと考える。

4. 成果物など



阪南市 LIP



阪南市について

阪南市は大阪府の南西部に位置し、大阪市から約40分、関西空港から約20分、和歌山市から約20分のアクセスの良い立地にあります。北は大阪湾に面し、南は和泉山脈と接しており、海・山を中心とした自然環境に恵まれ、山中溪の桜、箱作海水浴場、波汰神社、漁業や農業、地酒づくりなどの地場産業、歴史的なまち並みなど豊かな自然や多彩な歴史・文化等の地域資源を有しているとても魅力あふれている町です。

テーマ
「地方創生にかかる地場産物商品に関する調査・研究、デザイン考案等」



活動概要

- ① 阪南市の事業所を訪問、インタビュー
実際に事業所を訪問し、生産方法や売上傾向等、事業所の現状の把握
- ② アンケート調査、消費者の求める商品像の追求
調査を通し、実際に消費者から何を求められているかを具体的に把握
- ③ ミーティング、商品デザイン、選考
ミーティングで情報の擦り合わせを行い、各自アイデアをデザインに起こしその中から2案を選考



活動を通して学んだこと

阪南市のLIPに参加し、価格設定の仕方や、商品パッケージを作る際に必要なことを学ぶことができました。材料費や利益などを考慮し、価格を設定していくことや、パッケージを作る際には、目を引くデザインにすることが重要であると学び、商品プロデュースの授業に活かすことができました。

観光学部 1 回生

私は今回このLIPを通して、新しいものを開発するということの難しさを知りました。特に、既に存在しているものを、商品にするためには何が必要かを考える事に多くの時間を要しましたが、楽しい時間でもありました。将来、商品開発の携わることがあれば今回学んだことを生かし、魅力的な商品を顧客に提供できるように頑張りたいと思います。

観光学部 2 回生

和歌山県有田郡有田川町

学生との協働による継続的な棚田保全活動 (棚田ふぁむ)



【地域の基礎データ】

人 口：26,325 人（令和元年 12 月末現在）

高齢化率：31.6%（平成 31 年 1 月 1 日現在）

産 業：農業（みかん、山椒、花き）、林業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：32 名（1 回生：8 名、2 回生：10 名、3 回生：9 名、4 回生：5 名）

活 動 期 間：平成 23 年 7 月～

担 当 教 員：大浦由美

1. 活動実施の経緯

有田川町での第 19 回全国棚田（千枚田）サミット（2013 年度）開催決定をきっかけに、2010 年に県が企画した「棚田モニターツアー」に当時の観光学部生約 20 名が参加した。地域の農業者の高齢化とともに耕作放棄地が増加する当地の現状を目の当たりにして、学生側から「棚田保全ボランティア」のアイデアが出されたことをきっかけに、学内で棚田保全ボランティアへの参加者を募り、「棚田ふぁむ」を結成。2011 年 7 月から活動を開始した。



2. 活動の内容

- ・ 農作物の生産：コメ，サトイモ，大根，カボチャ，ゴボウなど
- ・ 農作業支援：サンショ収穫作業の支援，茶摘み・製茶作業の手伝い，草むしり
- ・ 地域活動支援：祭礼への参加，餅つき手伝い，溝普請（水路清掃），獣害防止柵の見回り
- ・ その他：活動広報誌の作成・配付，大学祭やイベントへの出店（棚田米や番茶を販売）

3. 活動を通じて

本活動は今年で 9 年目となる。交流会等には毎年卒業生の参加もみられ，幅広い世代が行き交う場となっている。今年度実施した調査*によれば，棚田ふぁむの活動は地元住民に好意的に受け止められているとともに，調査に応じた卒業生 19 名のうち約半数が卒業後も交流会への参加などの関わりを持ち，約 9 割が現在の活動にも関心を持って Facebook などで情報を見ていることがわかった。今後も定例の活動とともに，地区の現状や必要な支援についての調査活動を継続したい。

*新谷ほのか「域学連携による棚田保全活動の可能性—和歌山県有田川町沼地区を事例に一」（令和元年度卒業論文）

4. 成果物など

棚田ふぁむ

棚田ふぁむの結成

全国棚田サミット開催に向けて、和歌山県が平成22年に開催した棚田モニターツアーに参加、耕作放棄地が増加する棚田の現状を目の当たりにする。和歌山県と有田川町からの棚田保全活動の提案によって学内で参加者を募り、棚田ふぁむ結成。

平成23年度から有田川町沼地区で活動を開始。現在まで10年間活動。当初は棚田の保全を目的に活動していたが、現在は棚田と棚田を保全する地域の人を支える活動をしている。



有田川町沼地区

和歌山県中央部に位置し、「日本の棚田百選」に選定された「あらぎ島」をはじめとして、多くの棚田が点在しています。急傾斜地の棚田が美しく、近年では「ぶどう山椒」の栽培も盛んです。ただ、高齢化が進み、沼地区の人口割合はほとんどは高齢の方が占めています。そのため、棚田やぶどう山椒もいまはその方たちが栽培可能でも、後継問題や自分たちで栽培ができるかという問題が深刻です。



活動内容



田植え

5月



山椒収穫支援

7月



交流会

12月



天神祭

1月

感想・気づき

・ふぁむのおかげで地域で集まることが増えたとし、学生が来ることによって刺激があると話してくれて、少しでも力になれているのだと思うと素直に嬉しかった。自分の事だけを考えたら、もう現状維持が精一杯と言っていて、人口や、若い人が減っていることは思っている以上に深刻なのだと感じた。（勉強会）

・全体のお話を通して、地域の皆さんが本当にふぁむのことを褒めてくださったり、真剣に考えてくださっていることがわかり、純粋に嬉しかった。沼地区の将来についても、私が考えていたよりも前向きに皆さんが考えていらっしゃるふぁむとしてもっと何かお手伝い出来ないかなと思った。お話の中でもあった様にきっかけづくりにはふぁむがなれたら良いなと思った。ただ、現状維持しか考えられないと仰っていたことが少し悲しかったが、これが沼の現実だと思った。すぐには難しいと思うが、将来的に良い方向に向かえる様にふぁむとして継続的に関わっていきなと思った。また、ふぁむの活動ももっと責任感を持ってしなければいけないと改めて感じた。（勉強会）

・実際に自分で山椒を収穫してみて、先輩方からお聞きしていた山椒収穫の大変さを肌で感じる事ができました。また、沼地区の方々とコミュニケーションを取ることで、沼の現状や高齢化についてのお話も伺うことができ、良い経験になりました。（山椒収穫支援）

和歌山県日高郡日高川町および伊都郡かつらぎ町

「体験教育旅行&夏学習～都会と大自然の出会い」



【地域の基礎データ】

人口：	9,775 人（日高川町／令和元年 12 月末現在）
	16,650 人（かつらぎ町／令和元年 12 月末現在）
高齢化率：	34.9%（日高川町／平成 31 年 1 月 1 日現在）
	38.0%（かつらぎ町／平成 31 年 1 月 1 日現在）
産 業：	農業、林業 など（日高川町）
	農業、製造業 など（かつらぎ町）

【活動の基本情報】

参加学生数：	15 名（1 回生：12 名、2 回生：3 名）
活動期間：	平成 29 年 5 月
担当教員：	東悦子、中串孝志

1. 活動実施の経緯

2019 年度 LIP 夏旅は、教育学部との連携事業として 3 年目の取り組みであった。本事業は大阪府泉大津市と和歌山県日高川町との友好都市連携に基づく相互交流事業を土台とし、泉大津市と日高川町の小学生を対象とした。和歌山大学は教育学部と観光学部の学生が各学部の学びの特性を活かして、2泊3日の夏季学習キャンプの活動を企画し実施した。

2. 活動の内容

①泉大津市・日高川町プログラムは、8月19日～21日の日程で日高川町において実施。観光学部からは5名の学生が参加した。教育学部教員とともに中串孝志が引率した。

②和泉市・かつらぎプログラムは、8月22日～24日の日程で和泉市において実施。観光学部9名が参加（内1名は①、②の両プログラムに参加）。教育学部教員とともに東悦子が引率した。

夏季学習キャンプの準備として、教育学部教職大学院・岡崎裕教授による教育学部生と合同の事前研修が実施された。また両プログラムにおける活動の企画と準備はグループに分かれて学生が自主的に取り組んだ。さらに適宜、観光学部生のための LIP 夏旅としての事前・事後研修も行った。夏旅実施後、報告書の作成や合同報告会に向けての準備に取り組んだ。

3. 活動を通じて

小学生を対象とする企画に戸惑う様子もみられたが、実際に小学生に接する機会を得て、学生達は、児童の安全に留意しなければならない等の責任感が強まったようだ。LIP 報告会で発表する学生達は結束も強くなり、準備不足であった点などについて、活動の振り返りも的確であった。児童を導く立場を経験したことによって、学生達の成長ぶりがうかがえた。

4. 成果物など

夏旅 LIP

~和泉・かつらぎ都市間交流~



1 「夏旅」とは

和歌山県伊都かつらぎ町と大阪府和泉市との交友都市親善交流会を母体とし、かつらぎ町と和泉市に在住する小学生を対象とした一泊二日の夏合宿です。子供たちの交流や思い出を作る場の提供や、彼らが成長するための支援を私たち和歌山大学生が町、市、大学の教職員とともに行いました。



2 「夏旅」での我々の目的

子どもたちの親善交流会においてリーダーとなることによって私たちは

- 企画力
- 柔軟性
- リーダー性、主体性

を身に着けることを目的としています。



井川・池尾・上村・岡野
笠原・小西・土井・中塚・森本

3 活動の行程

前日準備

主催者の皆様と打ち合わせをし、会場の飾り付けもしました。



1日目

私たちが考えたアクティビティで子供たちと触れ合いました。



2日目

ハイキングでは私たちが引率して、子供たちの安全を管理しました。



まとめ(学びと課題)

3日間を経て私たちはたくさんのことを学びました。①子供たちとのふれあいを通して、接し方の難しさや安全管理の大切さを学びました。②他のスタッフを参考にして、最後には一人ひとりがそれぞれの接し方で子供たちと関わることができました。課題点を挙げるならば、準備においての自分の理解不足があり、そのままリハーサルに時間がかかってしまったことです。私たちはこの失敗を次に活かそうと思いました。子供たちだけでなく私たち学生もリーダーも皆が笑顔で楽しかったと思えるようにしようという気持ちで、事前準備を重ねてきました。最終日が終わると子供たちの別れを惜んでいる様子を目にし、より一層地域間の交流の大切さについて学ぶことができました。

和歌山県日高郡美浜町

カナダミュージアムにおけるミュージアム機能の強化



【地域の基礎データ】

人 口：21,841 人（令和元年 12 月末現在）

高齢化率：35.1%（平成 31 年 1 月 1 日現在）

産 業：漁業、農業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：12 名（1 回生：5 名、2 回生：1 名、3 回生：6 名）

活 動 期 間：令和元年 7 月

担 当 教 員：東悦子

1. 活動実施の経緯

LIP 美浜町は、2018 年 7 月に日高郡美浜町三尾にオープンしたカナダミュージアムの機能強化を目的とした活動であった。カナダミュージアムは、明治期より多くのカナダ移民を送出した三尾地区の歴史を伝えるミュージアムである。2019 年度受託研究（カナダミュージアム（機能強化））を受け、7 月に LIP 美浜町として募集を行い、3 年生から 1 年生で構成される学生たちが協働しつつ活動を行った。

2. 活動の内容

美浜町やその地の移民の歴史についての基礎知識を得るために文献の輪読と発表を行うことから開始した。また現地視察や移民をテーマとする他県のミュージアムの視察も行った。学生達は定期的にミーティングを開催し、機能強化のための具体的な案を提出し合い、検討の結果、来館者が楽しみながら展示への興味を喚起するためのミュージアムクイズの作成に取り組んだ。（1）クイズの素材集めを行い、内容について関係者の意見を伺い、内容を改善。（2）クイズの提示方法を考え、関係者と意見交換を行い、3 つの提示方法で進めることを決定。（パワーポイントによる提示。QR コードによる提示。三択クイズで絵合わせをする方法。）（3）グループに分かれ、3 つの提示方法の作業を進める。（4）概ね完成後、ミュージアムにて「クイズ大会（お試し会）」を行う。（5）参加者のフィードバックを受け、クイズの最終版を作成。

3. 活動を通じて

上回生がリーダーシップを発揮し全員が協働しつつも各自がそれぞれの役割を果たした。機能強化のアイデアを形として完成する過程において、学生が得た経験は今後活かされるものであり、全国有数の移民県である和歌山に関する理解も深まったと考えられる。

4. 成果物など

美浜町 LIP

【紹介】

和歌山県は、全国で6番目に多くの海外移住者を送り出しました。その中でも、和歌山県美浜町の三尾地区は通称”アメリカ村”と呼ばれ、カナダへ多くの移民を送り出した地域です。

私たちは、カナダミュージアムの機能強化を目標として取り組んできました。

【カナダミュージアムについて】



カナダミュージアム

美浜町の移民の歴史と文化を後世に伝える施設で、水色の外壁がシンボルです。和洋折衷の家屋で洋室と和室の両方があります。当時の人々がカナダに行く際に実際に使っていたスーツケースやパスポートなど貴重な品々が展示されています。館長の丁寧な説明を聞きながら、見学を楽しむことが出来ます。また、併設されているカフェではコーヒーやケーキなどを味わえます。

【これまでの活動内容】

■フィールドワーク

○カナダミュージアム及びアメリカ村の視察

カナダミュージアムの館長と美浜町役場の職員と現状の確認を行いました。クイズ作成(その他の活動参照)後、クイズ大会のデモンストレーションを行い確認しました。

○神戸視察

○横浜視察



視察の様子

■その他の活動

○会議

毎週1回、各グループの進捗報告や今後の活動方法などを決定するために会議を行います。

○クイズ作り

機能強化のひとつとして、アメリカ村やカナダミュージアム、カナダの知識を広く知ってもらえるようにクイズを作成しています。パネル版、QRコード版、パズル版、英語版など様々な層の方に対応できるよう複数種用意しています。

○イベント案作成

現在、季節に応じたイベントの考案に取り組んでいます。



会議の様子

【今後の展望】

横浜視察では、同分野を扱う博物館としては、国内最大規模の海外移住資料館を訪れ、学芸員より企画展についての指南を頂きました。ここに学んだことから、企画展をはじめとして、イベント、体験型展示を、実装する予定です。また、三尾に住む方々でも大半の方々がカナダミュージアムを知らないということから、知名度を向上させることを今後の課題としています。

岩手県胆江地方および和歌山県

農村ワーキングホリデーを活用した都市農村交流の「鏡効果」と農村再生手法としての可能性の検証



【地域の基礎データ】

人口：	131,710 人（胆江地方／令和元年 12 月末現在）
	16,650 人（かつらぎ町／令和元年 12 月末現在）
高齢化率：	31.9%（胆江地方／平成 27 年 1 月 1 日現在）
	38.0%（かつらぎ町／平成 31 年 1 月 1 日現在）
産 業：	農業（稲作、畜産） など（胆江地方）
	農業、製造業 など（かつらぎ町）

【活動の基本情報】

参加学生数：	33 名（1 回生：9 名、2 回生：9 名、3 回生：8 名、4 回生：7 名）
活動期間：	平成 26 年 6 月～
担当教員：	藤田武弘

1. 活動実施の経緯

「農村ワーキングホリデー」は、農業や農村に関心をもつ都市住民が、繁忙期の農作業を無償で手伝う代わりに農家から寝食の提供を受けるというもので、参加者と農家との深い交流を特徴とする“日本型グリーン・ツーリズム”のなかでも、最も「鏡効果（他者との交流を通じてみた日常生活に潜む価値への気づき等）」の高い取り組みである。学生を参加者とする域学連携型の農村ワーキングホリデーは、次世代の若者たちが、農業・農村が直面する地域課題を当事者意識をもって理解する機会を提供するとともに、多世代間の交流による「鏡効果」により地域のコミュニティが活性化するなどの変化が期待されている。

2. 活動の内容

岩手プログラムでは、①「農村ワーキングホリデー実施」（9月中旬3泊4日型と4泊5日型に分けて実施、学生33名参加／岩手大学ほか他大学学生15名と合同で実施）、②「岩手県農家の和歌山研修受入」（12月上旬1泊2日、受入農家14名が大学を訪問し参加学生と交流）、③「振り返りセミナー開催」（2月末に現地開催、教員と学生・卒業生が参加予定）のサイクルでの取り組みが定着している。

和歌山プログラムでは、①「観光ぶどう農園：ジベレリン処理・摘粒作業（6月上旬）/収穫および観光対応（8月下旬）」（農家民泊型かつらぎ町、学生6名参加）、②「道普請参加（日帰り）」（12月初旬かつらぎ町、学生4名参加）を実施し交流を重ねている。

3. 活動を通じて

各地でのプログラム毎に、①受入農家・参加学生を対象とした事前学習会の開催、②受入農家・参加学生のプロフィールシート作成、③実施中の業務報告と実施後のワークショップ開催、④参加学生のリアクションペーパーを編集した「記録集」を作成（各取組毎に作成）。これにより、地域（受入農家や地元行政）が取り組みの経験を暗黙知に留まらせることなく“可視化”し、持続的な取り組みに発展させることが可能となる。

4. 成果物など



農村ワーキングホリデー



活動目的

- WHを通じた交流の鏡効果が失われた農村の誇りの再生にどう寄与しているのかについて考える。
- 関係人口づくりの効果について考える機会にする。
- 農山村再生の手法としてのWHの可能性についても検証していく。
- 農村、農業の実際に触れることで問題意識を深め、当事者意識を持つ。



主な年間スケジュール



参加学生の感想

私たちの食生活の基盤を支えている農家の方の実態、農村への想いを知ることができた。
(岩手大学3年)



地域住民との交流を通して、本当の課題や解決策は、実際に目になければわからないと実感した。(和歌山大学2年)



今後の課題

- 受入農家
 - ・受入農家の高齢化に伴う受入農家数の減少
 - ・旅行としての楽しさを求めるWH参加学生の割合が増加している
 - ・農家と学生が交流する機会が少ないと感じている
- 学生事務局の運営に関して
 - ・主な事務作業を2人でやっているため、参加学生約40人と受入農家との連携をとることが難しい
 - ・事前事後学習の時間がほとんど設けられていない
 - ・WHを通しての学生同士の交流の機会が少ない



2019年度



LIP合同活動報告会

観光学部による地域実践型教育プログラムを知る

LIP合同報告会では、2019年度に実施した全14プログラムの参加学生が一堂に会し、活動の報告を行います。
学内関係者だけではなく、一般の方々の参加も歓迎いたします。多くの皆さまのご来場をお待ちしております。

2020年

2月8日(土)

13時00分～17時30分

(報告会：13時00分～16時30分)

(交流会：16時30分～17時30分)

和歌山大学 (和歌山市栄谷930番地)

西2号館 E-101教室

西4号館 T-101教室・多目的スペース

LIP (地域インターンシッププログラム) とは

地域活性化に関心をもつ学生が、現地に足を運び、地域住民と連携することによって、地域が抱える課題の解決を目指すプログラムです。
地域住民は生活者の視点から、学生は「ヨソ者」の視点から意見を出し合い、ともに活動を行うことで、双方にとって新たな気づきの機会となることがLIPの特徴です。

■お問い合わせ先

和歌山大学観光学部観光実践教育サポートオフィス

〒640-8510 和歌山市栄谷930

TEL/FAX 073-457-8553 E-mail/tourism-er@ml.wakayama-u.ac.jp

主催：和歌山大学観光学部

2019年度 LIP合同活動報告会 プログラム

2020年2月8日(土) 13時00分～17時30分



■受付・準備

12:30～13:00 受付(西4号館 T-101教室)

■2019年度 LIP合同活動報告会

13:00～13:10 開会あいさつ・趣旨説明(西2号館 E-101教室)

13:10～13:20 会場移動および報告準備

13:20～15:50 LIP活動報告(報告:10分、コメントシートまとめ:10分)

	西2号館 E-101教室	西4号館 T-101教室
13:20～13:40	上富田町 笑顔が広がる美しい里づくり	美浜町 カナダミュージアムにおけるミュージアム機能の強化
13:40～14:00	紀美野町(にこカフェ) 世代間交流を推進する地域拠点の企画・運営(コミュニティカフェ等での実践を通じて)	有田市 箕島の魅力発信
14:00～14:20	和歌山県全域(ねんりんピック) 「ねんりんピック紀の国わかやま2019」における、観光ツアー同行を通じた観光業務の実践	岩手県および和歌山県(農村WH) 農村ワーキングホリデーを活用した都市農村交流の「鏡効果」と農村再生手法としての可能性の検証
14:20～14:30	休憩(10分)	
	西2号館 E-101教室	西4号館 T-101教室
14:30～14:50	紀美野町(小川地区) 地区×学生による観光・文化・交流情報発信と棚田の再生	岩出市 ねごろ歴史の丘巡りスタンプラリー帳作成
14:50～15:10	那智勝浦町 地域の文化や風習の体験、獣害対策、農作業、冊子作りを通じて地域の方々と触れ合い、地域・自分・社会のあり方・つながり方を考える	紀の川市 紀の川スイーツの開発
15:10～15:30	日高川町およびかつらぎ町(夏旅) 「体験教育旅行&夏学習～都会と大自然の出会い」	広川町 津木地区寄合会の運営、特産品開発、情報発信、イベントを共に考える。
15:30～15:50	大阪府阪南市 地方創生にかかる地場産物商品に関する調査・研究、デザイン考案等	有田川町(棚田ふあむ) 学生との協働による継続的な棚田保全活動
15:50～16:00	会場移動および会場転換	
16:00～16:30	総括・閉会あいさつ(西2号館 E-101教室)	

■交流会

16:30～17:30 交流会(西4号館 T-101教室、多目的スペース)

- ・受付は、西4号館 T-101教室前にて12時30分から行います。資料の配布を行っておりますので、ご来場の際は、まず受付にお越しください。
- ・報告会場は西2号館 E-101教室と西4号館 T-101教室です。会場の移動は自由に行ってください。
- ・各報告後にコメントシートの記入時間がございます。疑問点・ご感想をいただけますと幸いです。総括の際に各LIP代表者がコメントシートに対するリプライを行います。
- ・報告会後には、自由な意見交換の場として交流会を行います。一般の皆さまの参加も歓迎いたしますので、ご参加ください

地域に観光を学ぶ

Local Studies



Local Internship Program (LIP)

地域が抱える課題を住民とともに発見し、その解決方法を考える。



和歌山大学観光学部では、和歌山県内及び大阪南部の市町村の協力のもと、地域が抱える課題を学生が調査する「地域インターンシッププログラム」(通称:LIP)を実施しています。

LIPは、地域活性化に関心をもつ学生が、現地に足を運び、地域の人びとと連携することによって地域の課題や調査活動に取り組むプログラムです。「学生と地域を活性化したい」、「地域の魅力を発見したい」といった各地域からの提案を受け、毎年複数のプログラムを行っています。

LIPに参加する学生は、学内の事前学習や現地視察を通して地域の実情を学びます。さらには現地調査や地域住民との交流、イベントの企画運営などを通じて、それぞれの地域の真の魅力や課題と向き合います。具体的なプログラムとしては、観光施設の職員や利用者への聞き取り、宿泊施設や農家民泊のモニター、観光資源調査やマップ作成、就業体験などに取り組んできました。

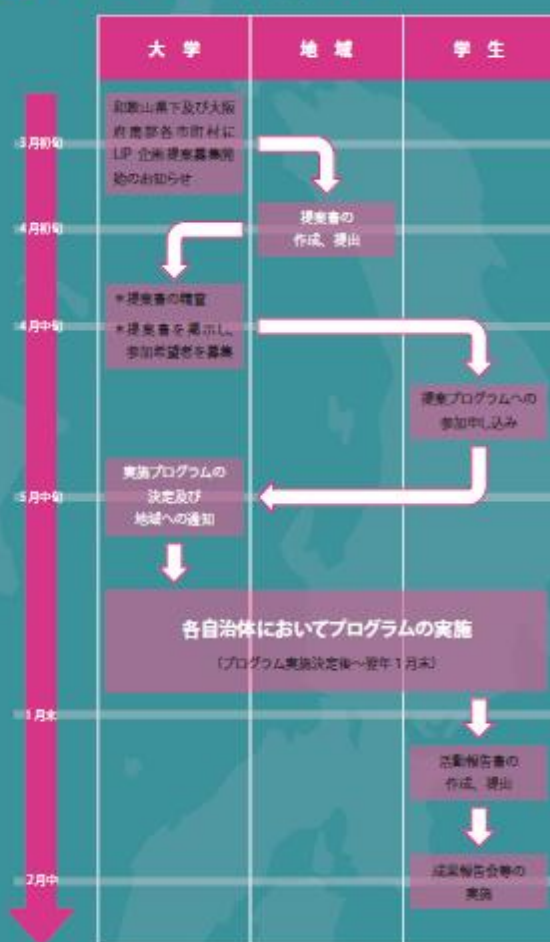
「この地域にはどのような観光資源があるか」「埋れている観光資源はないか」「観光資源が有効に活用されているか」「どうすれば地域が元気になるか」。こうした課題に対して、地域住民は生活者の視点から、学生は「ヨソ者」の視点から意見を出し合い、そして活動をともにします。このプロセスが、互いに新たな気づきをもたらします。

LIPは、こうした相互作用を通じて、地域は「ヨソ者」の力を活かしながら、より自立的なまちづくり活動を行う力を、そして学生は、地域の人々の思いを理解しつつ、地域活性化の方法を提案できる力を養い、地域を支える人材として活躍することを目指しています。



子ども食堂においてイベントを企画し、交流の場づくりに貢献しました(紀美野町)

●地域インターンシップ実施の流れ



※地域で一定時間以上活動した場合、単位が認定されます。(30時間ごとに1単位。単位上限あり。)

●実施プログラムの決定について

- 各地域より提案いただいたプログラムは、LIPの趣旨に沿った内容であるか、単位認定に必要な要件を満たしているかについて審査したうえで、学生の参加希望を募ります。
- 参加希望者が最少催行人数に達したプログラムについて、LIP学内予算を勘案し、実施プログラムを決定します。詳細は、観光実践教育サポートオフィスまでお問い合わせください。

地域に観光を学ぶ Local Studies Local Internship Program (LIP)



●地域インターンシップのこれまで

年次ごとの実施プログラム数

年度	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	合計
件数	6	8	3	4	11	5	10	15	21	19	13	115

年次ごとに実施プログラム数は異なりますが、毎年、幅広い分野のプログラムが実施され、各地域で学生たちが地域の方々と一緒に活動しています。

年次ごとの参加学生数

年度	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	合計
延べ人数	42	46	18	24	80	73	139	191	227	217	190	1247
異人数	33	45	17	23	68	69	122	169	196	190	179	1111

毎年多くの学生が自主的にプログラムに参加し、合計参加学生数は延べ人数で1000名を超えました。

これまでの実施プログラム (一部抜粋)

市町村名	内容
和歌山市	和歌山公園動物園の環境エンリッチメントを通じた観光活用
岩出市	SNSを活用した地域資源再発見と訪れてみたいくなるコンテンツ作り
紀の川市	紀の川スイーツの開発
かつらぎ町	かつらぎ町日帰りプランの作成
紀美野町	地元×学生による継続可能な地域活性化に向けた寄り添い型支援体制の構築と観光・交流情報発信
有田市	地元小学生が見つけた地域の資源に対する傾向・特性調査とその活用提案
広川町	津木地区寄合会の運営、特産品開発、情報発信、イベントを共に考える
有田川町	学生との協働による藤田保全活動体制の構築に関する基礎調査
日高川町	日高川町における祭事を中心とした伝統文化と地域活性化についての調査
由良町	観光地の新たな魅力発見
みなべ町	みなべ町の新たな魅力発見・発信事業
田辺市	黒山村ワーキングホリデーのシステム構築
串本町	マグロ料理で観光 PR
那智勝浦町	地域の文化や風習、そこで暮らす人々と共にふれあひながら、これからの地域・自分・社会のあり方・つながり方を考える
太地町	地域資源として移民集出の歴史を活かした観光の活性化を考える
和歌山県全域	「ねんりんピック紀の国わかやま 2019」大会参加者に対する観光ツアーの開発
大阪府堺市	マップを手にウォーキングをしたくなる気持ちを湧き立たせる「まち歩きマップ」の作成
大阪府大阪市	地方創生にかかわる地産地消物品に関する調査・研究、デザイン開発等



地場産品を活用した新商品開発のプレゼンを実施しました (大阪府大阪市)

●地域インターンシップ活動報告

紀美野町

地域内の活動団体と協力し、地域行事として開催されている秋祭りや冬まつりの準備・運営のサポートを行いました。



広川町

地区の寄合会と連携し、地域活性化の取り組みを支援する活動を行っています。毎週定期的にミーティングを行い、イベントへの出店も協力するなど活発な活動を展開しました。



有田市

商店街の古民家を改修してつくられた地域拠点において、小中高大学生と大人たちの交流を促進するような活動に取り組みました。



●参加者の声

那智勝浦町LIPは3年目の活動になり、各自が目的を持って現地で活動を行うことができました。現地に何度も付き住民と話し合いの機会を持てたこと、自身の研究テーマを見据えて現地で活動できたことなど、年間を通じて充実した活動ができました。これまでやこれからのLIP活動が地域の方々の助けになればと思います。(那智勝浦町LIP参加者)

広川町LIPに4年間携わってきました。4年間の活動を通じて、学生と地域の方々が、立場や視点の違いを超えて、地域に対する同じ気持ちを持つことで、地域の明るい未来へ共に進んでいくことができると知ることができました。大学を卒業後も、大学の活動とは関係なく、大好きな広川町の地域の方々と繋がりを大切にしたいと思います。(広川町LIP参加者)

学生との協働による地域活性化プログラムをご検討であれば、ぜひ一度、ご相談ください。

【問い合わせ先】

和歌山大学観光学部 観光実践教育サポートオフィス

電話 / Fax : 073-457-8553 E-mail : tourism-er@ml.wakayama-u.ac.jp

URL : <http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/>

地域インターンシッププログラム（LIP）の沿革

■2008～10年度（平成20～22年度）

地域インターンシッププログラム（通称 LIP ※2012 年度に改称）は、2008 年観光学部の設置とともにスタート。観光学部より和歌山県下の自治体への協力要請を行い、各教員が担当する自治体との協議を重ね、早いプログラムでは 2008 年度中に、遅いものでも 2009 年度中にはプログラムの実施に至った。

- ・実施状況／参加学生数（延べ人数）：
6 件／42 名（2008）、8 件／46 名（2009）、3 件／18 名（2010）

■2011 年度（平成 23 年度）

- ・地域連携担当の配置
- ・地域インターンシップ実施要項の整備
 - ◇地域（自治体）からプログラム内容について提案を受け付ける「地域提案型」と教員の地域との共同研究をベースとした「申請型」の 2 つのプログラムを設定。
 - ◇主要な活動対象エリアを、和歌山県内に加えて大阪南部の自治体（岬町、阪南市、泉南市、田尻町、泉佐野市、熊取町、貝塚市、岸和田市）にまで拡大。
- ・地域提案募集：5 月に送付
- ・実施状況／参加学生数（延べ人数）：4 件／24 名

■2012 年度（平成 24 年度）

- ・名称変更：RIP から LIP へ改称
- ・実施要項の改訂
 - ◇申請型については、主たる活動エリアを和歌山県内と大阪南部以外でも可とした。
- ・地域提案募集：5 月に送付
- ・実施状況／参加学生数（延べ人数）：11 件／80 名

■2013 年度（平成 25 年度）

- ・地域連携の所管が観光教育研究センター（現：観光実践教育サポートオフィス）となり、担当者を配置。
- ・LIP の制度改善を図るため、活動実績のある自治体の担当者にヒアリング調査を実施。
- ・LIP の認知度や参加意識を明らかにするため、学生対象のアンケート調査を実施。
- ・地域提案型プログラムの質向上のため、活動実績のある自治体や和歌山市周辺の自治体を廻り、LIP の評価の聞き取りや新制度についての周知活動を実施。
- ・地域提案募集：4 月に送付
- ・実施状況／参加学生数（延べ人数）：5 件／73 名

■2014 年度（平成 26 年度）

- ・LIP 周知活動の一環として、2014 年度活動の報告書を作成（以後継続して作成）。
- ・地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
- ・実施状況／参加学生数（延べ人数）：10 件／139 名

■2015 年度（平成 27 年度）

- ・ LIP 周知活動の一環として、2015 年度活動の報告書を作成。なお、報告書には、2008～2015 年度までの LIP に関するデータを所収（以後継続して所収）。
- ・ 地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
- ・ 実施状況／参加学生数（延べ人数）：15 件／191 名

■2016 年度（平成 28 年度）

- ・ LIP 周知活動の一環として、2016 年度活動の報告書を作成。
- ・ LIP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施（以後継続して実施）。
- ・ 地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
- ・ 実施状況／参加学生数（延べ人数）：21 件／227 名

■2017 年度（平成 29 年度）

- ・ LIP 周知活動の一環として、2017 年度活動の報告書を作成。
- ・ LIP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施。
- ・ 地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
- ・ 実施状況／参加学生数（延べ人数）：19 件／217 名

■2018 年度（平成 30 年度）

- ・ LIP 周知活動の一環として、2018 年度活動の報告書を作成。
- ・ LIP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施。
- ・ 地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
- ・ 実施状況／参加学生数（延べ人数）：13 件／190 名

■2019 年度（令和元年度）

- ・ LIP 周知活動の一環として、2019 年度活動の報告書を作成。
- ・ LIP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施。
- ・ LIP の質的向上、学びの深化、広い活動発信を目的に「LIP 合同活動報告会」を実施。
- ・ 地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
- ・ 実施状況／参加学生数（延べ人数）：14 件／194 名

【これまでの LIP 活動地域と活動テーマ一覧】

市町村名	活動年度	活動テーマ
和歌山市	2009	四季の郷公園周辺調査等
	2010	四季の郷公園と周辺農地を利用した農業観光の振興、および中心市街地との連携による活性化調査
	2011	お城を中心としたまちなか回遊性の創出
	2014	和歌山市民の森づくり事業
	2015・16	和歌山公園動物園（通称：お城の動物園）の環境エンリッチメントを通じた観光活用
	2016	地域資源を活用した、見どころマップの作成とまちあるきの実施(山東地域)
		名勝「和歌の浦」の魅力発信 和歌山市立伏虎中学校の閉校記念誌づくり
2016・17	観光資源を活用した観光振興の体験と調査・研究（和歌山城におけるおもてなし忍者による観光振興を通じて）	
2017	和歌山公園動物園（通称：お城の動物園）の地域資源としての観光活用～和歌山公園動物園の今後とリニューアルの検討～	

市町村名	活動年度	活動テーマ
岩出市	2015	観光地の活性化と情報発信
	2018	SNS を利用した地域資源再発見と訪れてみたくなるコンテンツ作り
	2019	ねごろ歴史の丘巡りスタンプラリー帳作成

市町村名	活動年度	活動テーマ
紀の川市	2009	青洲の里施設内で実習および農家民泊体験、地域住民との意見交換
	2010	「細野溪流キャンプ場」集客向上と地域活性化の検討
	2011	細野溪流キャンプ場を起点とした地域活性化
	2012-16	紀の川市地域活性化
	2018・19	紀の川スイーツの開発

市町村名	活動年度	活動テーマ
かつらぎ町	2008	花園ふるさとセンターの有効活用に関する調査研究
	2012	かつらぎ町日帰りプランの作成
		都市近郊中山間地域における交流型農業への展開可能性を探る

市町村名	活動年度	活動テーマ
橋本市	2009	青年の家やどりの運営体験およびリニューアルプランの検討

市町村名	活動年度	活動テーマ
紀美野町	2014	地域活性化にむけた調査研究（現地ヒアリング）
	2015-17	地区×学生による継続可能な地域活性化にむけた寄り添い型支援体制の構築と観光・交流情報発信
		世代間交流を推進する地域拠点の企画・運営（認知症カフェでの実践を通じて）
	2018	地区×学生による知られざる歴史掘り起こしと観光・文化・交流情報発信
	2018・19	世代間交流を推進する地域拠点の企画・運営（コミュニティカフェ等での実践を通じて）
	2019	地区×学生による観光・文化・交流情報発信と棚田の再生

市町村名	活動年度	活動テーマ
有田市	2013	みかん産地の農家の今後を考える（有田地域みかん農家経営継続課題調査）
		有田地域における魅力的な居住環境を考える（有田地域の居住地選定要因に関する調査）
	2014	地元小学生が見つけた地域の資源に対する傾向・特性調査とその活用提案
	2016	魅力ある図書館づくり—新図書館開館にむけて—
		空き家活用による地域活性化プロジェクト
	2017	市民が集う市民会館づくり—新市民会館開館にむけて—
	2017-18	地域で働く人の魅力を子どもたちに伝える
	2019	箕島の魅力発信

市町村名	活動年度	活動テーマ
有田川町	2008・09	観光スポット調査（鉄道フロムナード、あらぎ島・清水温泉周辺）、および各種施設における就業体験
	2010	観光スポット調査（観光ブドウ園ほか）、および各種施設における就業体験と町内宿泊施設におけるモニター宿泊
	2011	観光スポット調査、および各種施設（鶏卵牧場ほか）における就業体験と町内宿泊施設におけるモニター宿泊
	2012・13	学生との協働による棚田保全活動体制の構築に関する基礎調査
	2014	しみず体験・学習プログラムの開発
	2014-18	学生との協働による継続的な棚田保全活動体制の構築
	2019	学生との協働による継続的な棚田保全活動（棚田ふぁむ）

市町村名	活動年度	活動テーマ
湯浅町	2009	町内主要施設の視察と集客イベントへの活用法の検討、および有力事業者への観光誘客に関わる聞き取り、イベントにおける JAZZ バンド演奏会の開催

市町村名	活動年度	活動テーマ
広川町	2014-19	津木地区寄合会の運営、特産品開発、情報発信、イベントを共に考える

市町村名	活動年度	活動テーマ
由良町	2014	観光地の新たな魅力発見

市町村名	活動年度	活動テーマ
日高町	2016・17	地域資源の自慢を後世に引き継ぐと共に経済効果のある参加型イベントの企画立案を共に考える

市町村名	活動年度	活動テーマ
日高川町	2008	小学生の農村生活体験実習受入のための基礎調査
	2009	子ども農山漁村交流プロジェクト推進のための学生サポーターおよび課題発見
	2012	日高川町における祭事を中心とした伝統文化と地域活性化についての調査
	2017-19	体験教育旅行&夏学習～都会と大自然の出会い(かつらぎ町も含む)

市町村名	活動年度	活動テーマ
美浜町	2017	日の岬・アメリカ村の歴史的資源等を活用した観光とふるさと教育
	2019	カナダミュージアムにおけるミュージアム機能の強化

市町村名	活動年度	活動テーマ
みなべ町	2012	みなべ町の新たな魅力発掘・発信事業(みなべ観光協会事業)

市町村名	活動年度	活動テーマ
田辺市	2008	秋津野ガルデン附設レストラン「みかん畑」利用客の観光行動アンケート調査、及び田辺市広域市町村圏の関係者との意見交換
	2009	農山村における UJI ターン者と地元住民との連携
	2012	和歌山県版・農山村ワーキングホリデーのシステム構築
	2017	ほっとスポット温川プロジェクト

市町村名	活動年度	活動テーマ
上富田町	2008	観光資源調査と地域の農・商・工関係者との意見交換会
	2017	地域資源を活用した“おどろきと感動”の地域づくり
	2018・19	笑顔が広がる美しい里づくり

市町村名	活動年度	活動テーマ
すさみ町	2008	各種体験観光施設の調査と関係者への聞き取り

市町村名	活動年度	活動テーマ
串本町	2017	マグロ料理で観光 P R

市町村名	活動年度	活動テーマ
那智勝浦町	2016-18	地域の文化や風習、そこで暮らす人々と直にふれあいながら、これからの地域・自分・社会のあり方・つながり方を考える
	2019	地域の文化や風習の体験、獣害対策、農作業、冊子作りを通じて地域の方々と触れ合い、地域・自分・社会のあり方・つながり方を考える

市町村名	活動年度	活動テーマ
太地町	2009	移民関連勉強会、および地域住民、町職員との意見交換
	2012	地域資源として移民輩出の歴史を活かした観光の活性化を考える

市町村名	活動年度	活動テーマ
岬町	2012	「道の駅」建設に伴う検討委員会
	2015	マップを手にウォーキングをしたくなる気持ちを沸き立たせる「まち歩きマップ」の作成
	2016	岬フィールドミュージアム構想
	2017	着地型観光による地域活性化の取り組み
阪南市	2016	産業観光ワークショップ HANNAN OSAKA cotton project
	2018・19	地方創生にかかる地場産物商品に関する調査・研究、デザイン考案等
田尻町	2015	君が見つけたじりの魅力ー出会いと交流で創る健幸のまちー
熊取町	2015	第4回熊取ふれあい農業祭
	2016	第5回熊取ふれあい農業祭
	2017	第6回熊取ふれあい農業祭

市町村名	活動年度	活動テーマ
岩手県奥州市 および和歌山県	2012	故郷（ふるさと）への誇りを取り戻すためのグリーン・ツーリズム
	2013	農村ワーキングホリデーを通じた農村再生の可能性を探る
	2014-19	農村ワーキングホリデーを活用した都市農村交流の「鏡効果」と農村再生手法としての可能性の検証
北海道幕別町	2014・15	地域の観光に係る調査研究（観光と地域のあり方についての調査研究及び観光資源の掘り起こし等）
富山県南砺市	2015	五箇山における持続可能な観光の実現に向けた実証調査
長野県飯田市	2015・16	道の駅遠山郷を核とした地域活性化
宮崎県	2016	みやざき観光コンベンション協会からの依頼に基づいた同県「波旅宮崎」キャンペーンのより効果的な展開に対する提案、提言作成

地域・団体名	活動年度	活動テーマ
JA いずみの管内	2011・12	JA 直営型農産物直売所を拠点とした都市農村交流の推進
わかやま産業振興財団	2015・16	特産果樹がもたらす共創価値の創造（新たな健康・産業づくり）
公益社団法人日本マスターズ陸上競技連合	2017	公益社団法人日本マスターズ陸上競技連合が主催する国際・第38回全日本マスターズ陸上競技選手権大会においてスポーツを通じて、地域の人びとや海外競技者との国際交流
和歌山県全域	2018	「ねんりんピック紀の国わかやま 2019」、大会参加者に対する観光ツアーの開発
	2019	「ねんりんピック紀の国わかやま 2019」における、観光ツアー同行を通じた観光業務の実践

2019 地域インターンシッププログラム活動報告書
令和2年3月31日発行
発行 和歌山大学観光学部観光実践教育サポートオフィス
〒640-8510 和歌山県和歌山市栄谷 930
印刷 井手印刷株式会社

